

栗原市文化財調査報告書第11集

栗原市文化財調査報告書第11集

伊治城跡

伊
治
城
跡

— 平成 21 年度：第 39 次発掘調査報告書 —

平成 22 年 3 月

平成 22 年 3 月

宮城県栗原市教育委員会

宮城県栗原市教育委員会

伊治城跡

— 平成21年度：第39次発掘調査報告書 —

序 文

宮城県の北西部に位置する栗原市は、県の総面積の約11%を占め、豊かな自然と歴史的遺産が数多く残されております。貴重な歴史的遺産を次の世代に継承していくことは、今の時代を生きる私たちの責務であります。

平成21年度は平成20年6月14日に発生した岩手・宮城内陸地震からの「復興元年」として、「がんばろう 栗原」のもとに各地で復興の活動が行われました。市内に所在する多数の文化財も甚大な被害を受けましたが、所有者等の協力を得ながら修復を行い、今年度実施された国史跡仙台藩花山村寒湯番所跡の災害復旧工事の完成により文化財についての修復作業は終了となりました。修復にかかわられた所有者や専門家の方々に感謝申し上げます。

伊治城は創建年代と所在地が確定している数少ない城柵の一つで、東北地方の古代史を語る上で大変重要な遺跡であり、なかでも宝亀11年（780）に「伊治公皆麻呂の乱」が起きた場所として、『続日本紀』に記されています。昭和52年から始まった継続的な発掘調査によって、遺跡の概要が徐々に解明されており、城生野地区の方々のご理解とご協力により平成15年には国史跡に指定されました。

平成17年に保存管理計画書を策定し、今後の史跡保存について方針を定め、平成19年には「史跡伊治城跡調査整備指導委員会」を設置し有識者から発掘調査や環境整備について指導助言を頂いております。

今年度は史跡公園として整備を行うための追加資料を得ることを目的として発掘調査（第39次調査）を実施したほか、個人住宅建設及び個人住宅での浄化槽設置に伴う確認調査、県営ほ場整備事業にかかるわり伊治城跡東側の低地部の確認調査を実施しております。各種開発に伴う確認調査においては、遺構が確認された場合、事業主の協力をいただき、計画の変更をお願いしておりますが、やむを得ず事前調査を実施しているものもあります。今後、調査成果を踏まえ、遺跡の保護や調査研究、普及啓発活動をさらに進めていきたいと考えております。

最後になりましたが、調査にご指導・ご協力していただきました、宮城県教育庁文化財保護課、宮城県多賀城跡調査研究所及び関係機関、発掘調査を実施するにあたり土地を貸していただきました土地所有者の皆様、ご協力いただきました城生野地区の方々に深く感謝申し上げ、発刊に寄せる言葉といたします。

平成22年3月

栗原市教育委員会

教育長 亀井芳光

例　　言

1. 本書は宮城県栗原市築館字城生野に所在する史跡伊治城跡の平成21年度発掘調査（第39次調査）の報告書である。
2. 第39次調査は、国庫補助事業にもとづくものであり、栗原市教育委員会が主体となり、調査担当した。
3. 調査時における地区割りは、城生野自治会館前の伊治城跡「原点1」を基準点（0. 0）とし、この点と「原点2」と結ぶ線を基準として直角座標を組み、割り出している。
基準線の南北軸は、 $2^{\circ} 7' 9''$ 西偏する。基準点の座標値（第X系）は以下のとおりである。

| | | |
|-----|------------------|-------------------------------------|
| 原点1 | X = -136,867.547 | Y = 17,758.857 (世界測地系—TKY2JGDにより変換) |
| 原点2 | X = -136,864.350 | Y = 17,845.295 (世界測地系—TKY2JGDにより変換) |
4. 平面図中の地区割り：S20、W20などの表記は、「原点1」から南に20m、西に20mの位置にあることを示している。
5. 本遺跡の位置を示した第2図は、国土地理院発行の1/25,000の地形図「金成」、「築館」を使用して作製した。
6. 土色の記載は「新版標準土色帖」（2007）にもとづいた。
7. 本書の作成にあたっては、担当者全員の討議・検討を経て、安達訓仁が執筆・編集した。
8. 発掘調査および本書の作成に際しては下記の方々からご教示・ご指導を賜った。

史跡伊治城跡調査整備指導委員会委員長 進藤秋輝（東北歴史博物館館長）、副委員長 早川浩義（栗原市文化財保護審議会）、委員 今泉隆雄（東北大学大学院教授）、委員 後藤秀一（宮城県多賀城跡調査研究所所長）
佐藤則之、須田良平、菊池逸夫、天野順陽（宮城県教育庁文化財保護課）、古川一明、三好秀樹、吉野 武、廣谷和也（宮城県多賀城跡調査研究所）、村田晃一、柳沢和明、相原淳一、佐藤憲幸（東北歴史博物館）、白鳥良一（尚絅学院大学）、藤沼邦彦（元弘前大学）、佐川正敏（東北学院大学）、佐藤敏幸（東松島市教育委員会）、高橋誠明、車田敦、二瓶雅司（大崎市教育委員会）
9. 本遺跡では、遺構に種類ごとの略号と検出順の番号を付している。種類ごとの略号は以下のとおりである。
建物跡・門跡=SB、塙跡=SA、溝跡=SD、土坑=SK、築地塀跡=Sf、道路跡・性格不明遺構=SX
10. 第39次調査の成果の一部については現地説明会（平成21年12月26日）、第36回古代城柵官衙遺跡発表会（平成22年2月26、27日、東北歴史博物館）において公表しているが、すべてにおいて本書が優先する。なお、本書では第17、19、20次調査の内容も参照して考察を行っている。
11. 発掘調査の記録や出土品は栗原市教育委員会が一括して保管している。
12. これまでの本遺跡の発掘調査および調査報告書については、本文の後の付表1にまとめて示している。

目 次

序 文
例 言
目 次

| | |
|-------------------------------|----|
| I. 遺跡の位置と地理的環境..... | 1 |
| II. 遺跡の概要..... | 1 |
| III. 遺跡周辺の歴史的環境..... | 2 |
| IV. 第39次調査..... | 5 |
| 1. 調査要項 | 5 |
| 2. 第39次調査の目的..... | 5 |
| 3. 調査の経過と方法 | 6 |
| 4. 政庁南門地区で検出された遺構と遺物 | 7 |
| 5. 政庁・内郭間地区で検出された遺構と遺物 | 12 |
| 6. 考 察 | 20 |
| 7. 調査のまとめ..... | 33 |
| 付表 1. 伊治城跡の発掘調査 | 34 |
| 付表 2. 伊治城および栗原郡に関する古代史年表..... | 35 |
| 伊治城跡発掘調査報告書等一覧、引用・参考文献一覧..... | 36 |
| 写真図版 | |
| 附章 三沢窯跡出土遺物について..... | 47 |
| 報告書抄録 | |

図 目 次

| | | | |
|-----|-----------------|------|-----------------------|
| 第1図 | 東日本の古代城柵 | 第10図 | 政庁の変遷 |
| 第2図 | 伊治城跡と周辺の遺跡 | 第11図 | 政庁内郭間地区における遺構の重複関係 |
| 第3図 | 調査区の位置と周辺の地形 | 第12図 | 政庁・内郭周辺遺構模式図 |
| 第4図 | 政庁南門地区平面図・断面図 | 第13図 | 伊治城期以降の古代の遺物 |
| 第5図 | 政庁内郭間地区平面図・断面図 | 第14図 | 今回の調査地点と政庁及び内郭周辺の検出遺構 |
| 第6図 | SD750・SD751出土遺物 | | |
| 第7図 | SK753・SK766出土遺物 | 第15図 | 三沢窯跡の位置 |
| 第8図 | 政庁南門跡・目隠し崩壊の変遷 | 第16図 | 三沢窯跡出土遺物 |
| 第9図 | 政庁南辺築地崩壊跡 | | |

表 目 次

| | | | |
|-----|-----------------|-----|-------------|
| 第1表 | 政庁南門地区検出遺構土層注記 | 第4表 | 土坑遺構属性表 |
| 第2表 | 政庁内郭間地区検出遺構土層注記 | 第5表 | 三沢窯跡出土遺物観察表 |
| 第3表 | 溝跡遺構属性表 | | |

写真図版目次

| | |
|-------|---|
| 写真図版1 | 調査区遠景（上空より）、調査区遠景（南上空より） |
| 写真図版2 | 政庁南門地区、SB314（南上空より） |
| 写真図版3 | SB314（南より）、SB314P1（南より）、SB314P2（南より）、SB314P3（南より）、SB314P4断面（北より）、SB314P5（南より）、SB314P6断面（南より）、SF746（西より） |
| 写真図版4 | SB314・SF745（西より）、SB314・SF746（東より）、SX748断面（北より）、SA312・SD313（東より）、SA312P2（南より）、SA312P3（南より）、SA312P4（南より）、SA312P5断面（北西より） |
| 写真図版5 | 政庁内郭間地区、政庁内郭間地区近景（西より） |
| 写真図版6 | SD750検出状況（南より）、SD750断面（南より）、SD750築地崩壊土ブロック（西より）、SD750築地崩壊土ブロック（西より）、SD751検出状況（南より）、SD751断面（南より）、SD751築地崩壊土ブロック（西より）、SD751築地崩壊土ブロック（西より） |
| 写真図版7 | SK753検出状況（東より）、SK753断面（東より）、SX765検出状況（南東より）、SD754・SA760・SA761検出状況（南より）、SA760柱痕跡確認状況（西より）、SD754・SA760断面（東より）、SD762検出状況（西より）、SD762断面（西より） |
| 写真図版8 | 出土遺物 |
| 写真図版9 | 三沢窯跡出土遺物 |

I. 遺跡の位置と地理的環境

伊治城跡は宮城県栗原市築館字城生野に所在する。遺跡が所在する宮城県北部の地形を見ると、東側の海岸部には北上山地が、西側には奥羽山脈が南北に走り、中央部を北上川が南流している。西側の奥羽山脈は山麓部で多数の河川によって開析され、いくつかの丘陵に分岐している。そのうち、最も北側にある築館丘陵は江合川と迫川に挟まれており、丘陵端部ではさらに多くの小丘陵に分かれている。

遺跡は小丘陵東端部に続く標高20~28mほどの河岸段丘に立地しており、北側は二迫川、南側から東側にかけては一迫川、西側は北から入り込む沢によって画されている。遺跡の範囲は、これまでの調査成果や地形から、およそ東西700m、南北900mの広がりをもつと考えられる（第3図）。

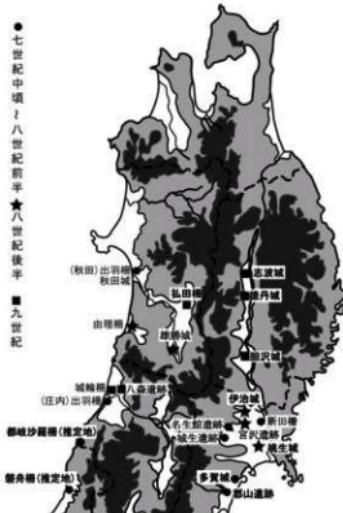
II. 遺跡の概要

伊治城は、8世紀後半から9世紀初頭にかけて律令政府が東北地方経営のために設置した城柵の一つである。奈良・平安時代の政治・軍事の中心地である陸奥国府多賀城と、平安時代に鎮守府が置かれた胆沢城とのほぼ中間に位置している（第1図）。

また、桃生城と共に創建年代が明らかな城柵として重要で、その所在地については多くの論考があり、本遺跡も有力な候補地の一つであった。この間の詳しい研究史については、『伊治城跡』（宮城県多賀城跡調査研究所1978）を参照していただきたい。

昭和52年から3年間にわたる宮城県多賀城跡調査研究所の発掘調査や、昭和62年からの築館町教育委員会・宮城県教育委員会による発掘調査で、本遺跡が伊治城跡であることが明らかとなった（付表1）。

調査の結果、伊治城は、土塁や大溝、築地堀による区画施設を周囲に巡らし、その内部の南に偏った地点に東西約185m、南北245mの平行四辺形に築地堀で区画したとみられる内郭を配しており、内郭の中央に東西約55m、南北約60mの範囲に築地堀を巡らせた政庁が存在することが明らかになった。政庁には正殿を中心として脇殿や後殿、前殿などが配置されている。これらの建物群は大別して3時期の変遷があり、2時期目は火災に遭っている。内郭には建物を主体とした官衙ブロックが設けられ、特に北西部は、創建期に桁行5間の建物6棟以上が南北に開く「コ」の字型配置をとっている。外郭は、施設の違いから内郭北辺を境に2分され、南側は建物・堅穴住居などで構成される官衙



第1図 東日本の古代城柵（進藤1991一部改変）

域であり、伊治城全体からみて2/3以上を占める北側は、竪穴住居を主体とする住居域として利用されていたと考えられる。外郭区画施設は北辺、東辺、西辺が土塁と大溝であり、南辺は築地堀と考えられている。また、第31・33次調査地点では火災に遭った外郭南門跡が確認され、火災後に築地堀が位置を変えて構築されていることが判明した。さらに、火災後に外郭南辺から北にのびる築地堀が造営されており、外郭南部の区画施設の様相を考える上で、その構造や変遷が新たな課題となった。

出土遺物として特筆されるものとしては、日本で初めて弓の一種である「弩」の一部「機」が出土した（第25次調査）。

平成15年8月27日には内郭域を含む93,581.47m²が国史跡に指定された。平成17年7月14日には未同意だった2,900m²が追加指定され、総指定面積は96,481.47m²となっている。

III. 遺跡周辺の歴史的環境

このことについては、『伊治城跡・嘉倉貝塚』（築館町教委2002）で詳述しており、参照していただきたい。以下では伊治城と同時代の奈良・平安時代の周辺の遺跡を概観する（第2図）。

発掘調査された集落跡には、築館地区佐内屋敷遺跡（宮城県教委1983）、原田遺跡（宮城県教委1980a、2009）、嘉倉貝塚（築館町教委2002、2003、宮城県教委2003）、鰐沢遺跡（築館町教委2005）、下萩沢遺跡（宮城県教委2009、栗原市教委2008）、青野遺跡、志波姫地区御駒堂遺跡（宮城県教委1982）、宇南遺跡（宮城県教委1980b）、大門遺跡（宮城県教委1980c）、糠塚遺跡（宮城県教委1978）、大天馬遺跡、金成地区佐野遺跡（宮城県教委1980d）、栗駒地区長者原遺跡（栗駒町教委1995）、泉沢A遺跡（栗原市教委2006）、水吸遺跡（栗原市教委2007）などがある。このうち、糠塚遺跡は東に約5kmにあり、住居跡出土土器は県北地域の国分寺下層式土器の基準資料となっている。南に約2.5kmにある御駒堂遺跡では、奈良・平安時代の造構・遺物の他に、8世紀前半頃の関東地方からの人間の移住が想定されるような土器や住居跡が発見されており、伊治城成立以前の栗原地方の動向を考える上で注目される。南に4kmにある下萩沢遺跡では伊治城存続期と同時期の掘立柱建物跡、竪穴住居跡が発見された。集落には、溝、材木塀を周囲に巡らせていた可能性が指摘されるとともに、建物の方向を揃えて計画的に配置された建物群がみられる。また北西約2.5kmにある泉沢A遺跡でも、計画的に配置された掘立柱建物跡が発見されている。この2遺跡は他の集落とは異なる様相を示していることから、伊治城との関わりが考えられる。

生産遺跡では、西に約4kmの築館地区にある須恵器を焼いた岩ノ沢窯跡や、東に約4kmの志波姫地区にある須恵器を焼いた狐塚遺跡、北に約6kmの金成地区にある須恵器や瓦を焼いた小迫神社窯跡があげられ、製品が伊治城に供給されていた可能性が考えられる。

北に約6kmの栗駒地区の丘陵上には、銙帶金具などが発見された、33基の小円墳からなる鳥矢ヶ崎古墳群がある（栗駒町教委1972）。また、北に約2kmの築館地区には大沢横穴墓群、姉歯横穴墓群があり、伊治城を含む周辺一帯の支配層の墓と考えられる。北に約3kmの栗駒地区には『吾妻鏡』に登場する栗原寺跡と推定される地点があり、古代末の遺構や出土遺物は未確認ながらも、10世紀前半の池跡（宮城県教委1996）や平安時代中期以降の礎石建物跡（栗原寺調査団1963）が発見されており、付



| No. | 道路名 | 種別 | 時代 | No. | 道路名 | 種別 | 時代 | No. | 道路名 | 種別 | 時代 |
|-----|--------|--------|-------------|-----|--------|-----|-----------|-----|--------|--------|------------------|
| 1 | 伊治城跡 | 城郭・散布地 | 昭和・古墳・奈良・平安 | 13 | 油ノ沢遺跡 | 散布地 | 古代 | 25 | 難塚遺跡 | 集落 | 弥生・奈良・平安 |
| 2 | 下森遺跡 | 集落 | 調文・古代 | 14 | 高田山遺跡 | 散布地 | 調文・古代 | 26 | 大門遺跡 | 集落 | 調文・奈良・平安・中世 |
| 3 | 栗原寺跡 | 寺院 | 古代・中世 | 15 | 原田遺跡 | 集落 | 調文・中・古代 | 27 | 孤塚遺跡 | 墓群 | 古代 |
| 4 | 尾松遺跡 | 散布地 | 古代 | 16 | 源光遺跡 | 散布地 | 調文・古代 | 28 | 熊谷遺跡 | 集落 | 調文・古代 |
| 5 | 長者原遺跡 | 集落 | 古墳前・中・古代 | 17 | 佐内屋敷遺跡 | 集落 | 調文・奈良・平安 | 29 | 篠ノ原跡遺跡 | 集落・館跡 | 調文後・弥生～近世 |
| 6 | 泉弘人遺跡 | 集落 | 古代 | 18 | 木戸遺跡 | 集落 | 調文・中・古代 | 30 | 吹付遺跡 | 集落 | 古代 |
| 7 | 大仏山古墳群 | 円墳 | 古墳後・古代 | 19 | 蛭沢遺跡 | 集落 | 調文後・古代・中世 | 31 | 宇南遺跡 | 集落・館跡 | 調文前・後・奈良～近世 |
| 8 | 姉曲横穴墓群 | 横穴墓 | 古墳後 | 20 | 照越台遺跡 | 散布地 | 調文・古墳・古代 | 32 | 御狗堂遺跡 | 集落 | 調文～近世 |
| 9 | 佐野跡 | 集落 | 弥生・古代 | 21 | 五俵台遺跡 | 散布地 | 調文～中・施・古代 | 33 | 山ノ上遺跡 | 集落 | 調文・古代 |
| 10 | 大茨横穴墓群 | 横穴墓 | 古墳後・古代 | 22 | 森倉貝塚 | 集落 | 調文前・弥生・古代 | 34 | 淀遺跡 | 散布地・集落 | II・III番・古墳・古代・中世 |
| 11 | 棚切共根遺跡 | 散布地 | 調文・古代 | 23 | 斯敷治部遺跡 | 散布地 | 調文・中・施・古代 | 35 | 大沢遺跡 | 集落 | 調文・古代 |
| 12 | 長内殿散遺跡 | 散布地 | 調文・古代 | 24 | 刈敷袋遺跡 | 散布地 | 調文・古代 | 36 | 堂の沢遺跡 | 散布地 | 古代 |

第2図 伊治城跡と周辺の遺跡

近からは仏像が見つかっている。



- 第39次調査区
- これまでの調査区
- - - 外郭推定線

- ①～③次：宮城県多賀城跡調査研究所
- 第1～30次：築館町教育委員会
- 第31～39次：栗原市教育委員会

第3図 調査区の位置と周辺の地形

IV. 第39次調査

1. 調査要項

遺跡名：伊治城跡（宮城県遺跡登録番号：41007）

調査地：宮城県栗原市築館字城生野地蔵堂地内

調査主体：栗原市教育委員会 教育長 亀井 芳光

調査担当：栗原市教育委員会文化財保護課 安達訓仁 三浦 実 芳賀 雅子

調査指導：宮城県教育庁文化財保護課、史跡伊治城跡調査整備指導委員会 委員長 進藤秋輝

調査期間：平成21年12月10日～12月28日

調査面積：約360m²

2. 発掘調査の目的

伊治城跡の調査は、これまで政庁の規模や建物配置の解明、内郭と外郭の区画施設及び両地区の官衙ブロックの構造と変遷の把握を目的に実施してきた。特に政庁付近では大規模な火災に遭遇したことが確認されており、遺構の重複関係や出土遺物から宝亀11年（780）「伊治公啓麻呂の乱」により焼失した建物群（政庁Ⅱ期）、これ以前の伊治城創建期とみられる建物群（政庁Ⅰ期）、火災復興後の建物群（政庁Ⅲ期）の変遷が確認されている。

平成19年度から開始された第5次5カ年計画では政庁及び内郭域について史跡整備を行うための追加資料を得ることを目的としている。3年目である今年度は①政庁南門跡、目隠し堀跡の再調査と②政庁・内郭間の政庁中軸線周辺での遺構のあり方を確認することとした。

これまでの調査で政庁南門跡は火災後に再建されておらず、政庁南辺の南20mで築地崩壊土ブロックが含まれるSD322が確認されたことから、政庁は南に拡張されたと想定されていた（第19次）。しかし、第20・21次調査ではSD322は折れ曲らず、西側に続くことが明らかとなり、第35次調査ではSD322の東延長に位置するSD700が確認されるとともに、SD700と並行あるいは直交する位置にあるSD701、SD702が確認され、SD700と直交する位置にあるSD702は南にのびることが判明した。火災後に政庁が南に拡大した可能性は低くなり、また、政庁を構成する主要な建物の配置は火災後も大きな変化がないことから、火災後の政庁の範囲は変化していない可能性が高くなった。そのため、政庁南門跡及び目隠し堀跡について、火災後の政庁南門跡及び目隠し堀跡が同位置で再建されているかどうか、再度発掘調査を行なうこととした。

また、SD322とSD700、701、702とかかわる遺構が南側へのびると想定されたことから、その南延長の確認を行なうこととした。周辺の調査としては平成5年に実施された富野駐在所への水道管敷設工事の際の立会いがある（第14図）。この際、3つの落ち込みが確認されている。1つが西側に、2つが近接し東側にあり、これらの位置はSD322と直交する遺構とSD702の南側への延長上に位置するとみられることから、この北側に調査区を設け、遺構の構造や年代について検討を行なうこととした。

3. 調査の経過と方法

政府南門地区（S N区）と政府内郭間地区（I K区）の2ヶ所に調査区を設定し、平成21年12月10、11日に重機を用いて表土除去を行ない、その後遺構確認作業を行った。政府南門地区では政府南門跡（SB314）と目隠し堀跡（SA312）を再検出し、確認されている以外の政府南門跡はないことを確認したのちに、これまで確認されている政府南門跡と目隠し堀跡の柱穴について、平面での確認と前回の調査で断ち割りが行われた柱穴の断面を用いて検討を行った。検討に際しては、宮城県教育庁文化財保護課、宮城県多賀城跡調査研究所、東北歴史博物館、大崎市教育委員会、東松島市教育委員会に在籍する各研究者に指導をいただいた。精査の結果、政府南門跡と目隠し堀跡とともに平面形及び断面で3時期の重複が確認され、政府南門跡本柱の最も新しい柱穴埋土には焼土粒が含まれていることから、火災後に政府南門跡が再建されており、火災後の政府の規模が確定した。その後、政府南門跡を復元するための資料を得るため、本柱の柱穴1個について断ち割りを行い、記録を作成した。政府内郭間地区では溝跡、土坑などが確認された。調査区の東で確認されたSD750は第35次調査で確認されたSD702の南側延長とみられ、調査区西側で確認されたSD751はSD322と直交する位置関係をもつものであった。2条の溝跡は方向が政府中軸線と一致しており、溝と溝の間が政府南門へ至る道路であると想定された。また、この溝にはいざれも築地堀ないしは版築土塁の崩壊土が含まれていた。確認された遺構は平面確認を基本とし、一部の遺構については年代や性格を確認するため、最小限掘り下げを行った。12月26日までに各種記録を作成した。平面図、断面図は縮尺1/20で作成し、写真記録はラジコンヘリによる空中写真と遺構細部は一眼レフのデジタルカメラ（800万画素）を用いて行った。調査成果の概要が判明した12月26日に現地説明会を開催し、約40名の参加者を得た。その後、人力により遺構の埋め戻しを行った後、12月28日までに重機による埋め戻しを行い、機材を撤出して野外調査を終了した。埋め戻しは遺構面を厚さ0.2mの黒ボク土で覆い、その上に調査で発生した土を被せて行っている。

調査終了後、出土遺物の水洗い、ネーミング、接合作業を行い、報告書の執筆、編集作業を行い、平成22年3月30日に事業の一切を終了した。

4. 政府南門地区で検出された遺構と遺物

政府南門跡付近は第19次調査で調査されており、今回、政府南門跡、目隠し堀跡、築地堀跡の基礎地業、築地構築に伴う土取り溝跡を再検出し、さらに新たに東に約2m拡張し、政府南門跡東側で築地堀跡の基礎地業、築地構築に伴う土取り溝跡、政府南門跡南側で通路に伴うとみられる掘り込み地業が検出された。遺物はほとんど出土せず、溝跡から平瓦が1点出土したのみである。

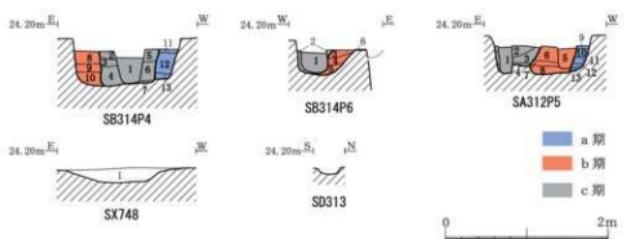
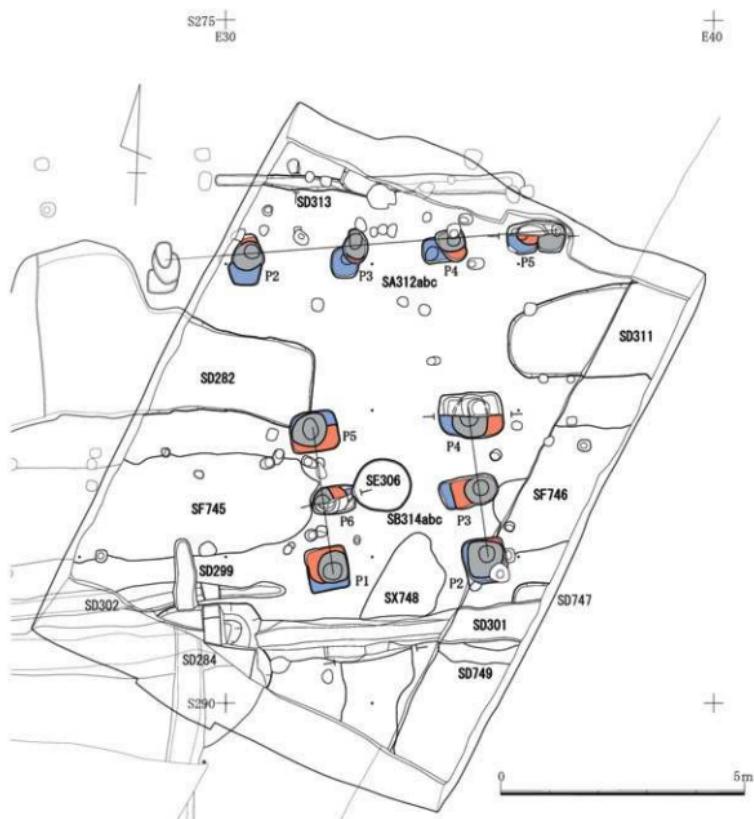
①基本層序

新たに拡張した東側での基本層は次のとおりである。遺構はすべてⅡ層で検出作業を実施した。

0層 砂利などによる盛土。厚さ0.52m。

I層 暗灰黄色（2.5Y4/2）粘土。盛土以前の耕作土とみられる。厚さ0.23m。

II層 にぶい黄橙色（10YR6/4）粘土。地山である。礫を含む。SB314P4、SA312P5、SD284の底面付近では砂や礫を含む灰黄褐色（10YR5/2）粘土である。



第4図 政庁南門地区平面図・断面図

②門 跡

SB314政庁南門跡

調査区南側で確認された。桁行1間、梁行2間の四脚門である。平面、断面を検討した結果、3時期の掘り方が確認された。今回の調査では遺物は出土していない。

SB314cは柱穴6個が確認された。総長は本柱間で3.3m、西妻で3.0m（柱間寸法は北より1.65m、1.65m）である。方向は西側柱列で計測するとN-6°-Wである。柱穴は隅丸方形あるいは楕円形で、規模は長軸0.7～1m、短軸0.6～0.7mである。本柱の柱穴の規模は長軸0.6～0.7m、短軸0.5～0.6mである。深さは断ち割りを行った柱穴で0.58m、本柱では0.41mである。埋土は地山ブロックを含む灰黄褐色粘土、黒褐色粘土である。本柱の柱穴2個には焼土粒がわずかに含まれる。

柱痕跡が4ヶ所、抜き取り痕跡は2ヶ所で確認された。柱痕跡は径0.30～0.35mである。深さは0.55m、本柱では0.41mである。堆積土は焼土粒、炭粒をまばらに含む黒褐色シルトや褐色シルトである。

SB314bは柱穴6個が確認された。総長や方向はSB314cと同じとみられ、SB314aをやや東にずらして造営されたとみられる。柱穴は隅丸方形あるいは隅丸長方形とみられ、規模は長軸0.8～1m、短軸0.6～0.8mである。本柱の柱穴の規模は長軸0.4m以上、短軸0.6mである。深さは断ち割りを行った柱穴で0.58m、本柱では0.43mである。埋土は黒色土ブロックを含むにぶい黄橙色粘土、にぶい黄褐色粘土である。

SB314aは柱穴6個が確認された。総長や方向はSB314cとほぼ同じとみられる。柱穴は隅丸方形あるいは隅丸長方形とみられ、規模は長軸0.8～1m、短軸0.5～0.9mである。本柱の柱穴の規模は長軸0.5m以上、短軸0.5～0.7mである。深さは断ち割りを行った柱穴で0.50m、本柱では0.13mである。埋土は地山ブロック、黒色土ブロックを多く含む灰黄褐色粘土質シルト、地山ブロック、黒色土ブロックをまばらに含むにぶい黄褐色粘土である。

③堀 跡

SA312目隠し堀跡

調査区北側で確認された。政庁南門跡の北側に位置する4間の堀跡である。政庁南門跡北端の柱穴からは約3.6m離れて位置する。今回の調査では西端の柱穴をのぞく、4個の柱穴が確認された。平面及び断面を検討した結果、3時期の掘り方が確認された。今回の調査では遺物は出土していない。

SB312cは柱穴が4ヶ所確認された。SB312bの柱抜き取り穴を利用して造営されており、東端の柱穴では位置を東にずらして造営されている。方向はE-5°-Nである。柱間寸法は西より2.1m、2.1m、2.1mであり、第19次調査で確認された総長は8.1mである。柱穴は隅丸方形や楕円形であり、長軸0.6m、短軸0.5mである。断ち割りを行った柱穴では柱部分が深くなる段掘り状であり、深さは0.38m（柱部分は0.52m）である。埋土は地山ブロックを含む黒褐色粘土質シルト、にぶい黄褐色粘土質シルトであり、炭粒が含まれる。柱痕跡は4ヶ所で確認された。径0.15～0.20mであり、堆積土は炭粒を若干含む灰黄褐色粘土質シルトである。

SB312bは柱穴が4ヶ所確認されたが、柱抜き取り穴はSB312c造営の際に利用されているため、全体の平面形や規模が確認できるものは1ヶ所のみである。SB312aを北に若干ずらして構築されている。

第1表 政府南門地区検出遺構土層注記

SB314P4

| No. | 土色 | 土性 | 含有物など | 堆積範囲 |
|-----|--------|---------|--------|-------|
| 1 | 黒褐色 | 10YR3/1 | シルト | c 振り方 |
| 2 | 黒色 | 10YR2/1 | 粘土質シルト | |
| 3 | 灰黄褐色 | 10YR4/2 | 粘土 | |
| 4 | 灰黄褐色 | 10YR4/2 | 粘土 | |
| 5 | 黒褐色 | 10YR3/2 | 粘土質シルト | |
| 6 | 黒褐色 | 10YR3/2 | 粘土質シルト | |
| 7 | にぶい黄褐色 | 10YR6/4 | 粘土 | b 振り方 |
| 8 | にぶい黄褐色 | 10YR5/3 | 粘土 | |
| 9 | にぶい黄褐色 | 10YR5/3 | 粘土 | |
| 10 | 明黄褐色 | 10YR7/6 | 粘土 | a 振り方 |
| 11 | 灰黄褐色 | 10YR4/2 | 粘土質シルト | |
| 12 | にぶい黄褐色 | 10YR4/3 | 粘土 | |

SB314P6

| No. | 土色 | 土性 | 含有物など | 堆積範囲 |
|-----|--------|---------|--------|----------------------------------|
| 1 | 褐色 | 10YR4/4 | シルト | 燒土粒、炭粒まばらに含む。 |
| 2 | 黒褐色 | 10YR3/2 | 粘土質シルト | 地山ブロック、黒色土小ブロックを置く含む。燒土粒、炭粒若干含む。 |
| 3 | 明黄褐色 | 10YR7/6 | 粘土 | 黒色土、灰黄褐色土粒を含む。 |
| 4 | 灰黄褐色 | 10YR5/2 | 粘土質シルト | 地山ブロック、地山粒、黒色土粒をまばらに含む。 |
| 5 | にぶい黄褐色 | 10YR7/8 | 粘土質シルト | 褐色粘土質シルトを含む。 |
| 6 | 黒 | 10YR2/1 | 粘土 | 地山ブロック、地山粒を多く含む。 |

SA312P5

| No. | 土色 | 土性 | 含有物など | 堆積範囲 |
|-----|--------|-----------|--------|---------------------------|
| 1 | 灰黄褐色 | 10YR4/2 | 粘土質シルト | 地山粒、地山ブロックを含み、炭粒を若干含む。 |
| 2 | 黒褐色 | 10YR3/1 | 粘土質シルト | 地山ブロック、地山粒をまばらに含む。 |
| 3 | 黒褐色 | 10YR3/2 | 粘土質シルト | 地山小ブロックを多く含む。 |
| 4 | にぶい黄褐色 | 10YR5/3 | 粘土質シルト | 地山粒をまばらに含む。 |
| 5 | 黒褐色 | 10YR3/1 | 粘土質シルト | 細かい地山粒、地山ブロックを若干含む。 |
| 6 | 黒褐色 | 10YR3/1 | 粘土質シルト | 地山小ブロックをまばらに含む。 |
| 7 | 褐色 | 10YR4/1 | 粘土質シルト | 地山粒をまばらに含む。 |
| 8 | 黒褐色 | 10YR3/1 | 粘土質シルト | 地山小ブロックをまばらに含む。 |
| 9 | 黒色 | 10YR2/1 | 粘土質シルト | 褐色シルト、地山粒、地山小ブロック、黒色土を含む。 |
| 10 | 黒褐色 | 10YR3/1 | 粘土質シルト | 地山粒、地山ブロックを多く含む。 |
| 11 | 黒色 | 10YR1.7/1 | 粘土 | 地山粒をまばらに含む。 |
| 12 | 明黄褐色 | 10YR7/6 | 粘土 | 黒色土粒をまばらに含む。 |
| 13 | 褐色 | 10YR4/1 | 粘土質シルト | a 振り方 |

SX748

| No. | 土色 | 土性 | 含有物など | 堆積範囲 |
|-----|------|---------|--------|-------------------------------|
| 1 | 灰黄褐色 | 10YR4/2 | 粘土質シルト | 地山ブロック、黒色土ブロックを含み、炭粒を若干含む。人為。 |

想定される方向はE-3°-Nである。柱間寸法は柱痕跡の位置や抜き取り穴などの位置から推定すると西より2.1m、1.7m、1.7mであり、第19次調査の成果を参考にすると総長7.5mとなり、SB312cの総長よりやや短いと考えられる。柱穴は隅丸方形や梢円形であり、長軸0.6m、短軸0.5mと推定される。断ち割りを行った柱穴では深さは0.45mである。埋土は地山ブロックを含む黒褐色粘土質シルト、褐色粘土質シルトである。柱痕跡は1ヶ所で確認された。径0.22mであり、堆積土は地山粒、地山ブロックを含む黒褐色粘土質シルトである。深さは0.40mである。

SB312aは柱穴が4ヶ所確認された。SB312 bに壊されている。想定される方向はE-7°-Nである。

柱間寸法は柱痕跡の位置などから推定すると西より2.0m、1.8m、2.0mであり、第19次調査の成果を参考にすると総長7.5mとなる。柱穴は隅丸方形であり、長軸0.7m、短軸0.6mである。断ち割りを行った柱穴では深さは0.44mである。埋土は地山ブロックを含む黒褐色粘土質シルトと黒色粘土質シルトの互層である。柱痕跡は2ヶ所で確認された。径0.20mであり、堆積土は炭粒や地山粒を若干含む黒色粘土である。

④築地壠跡

SF745築地壠跡、SF746築地壠跡

政庁南門跡東西で確認された、南門跡棟通りにとりつく築地壠跡である。南門の柱穴は築地基礎地業を掘り込んで造営されている。築地本体は残存していないが、寄柱穴と基礎地業が確認された。方向は寄柱穴の芯々で計測するとE-4°～5°-Nである。基礎地業は幅2.08～2.40m、深さ0.2mを溝状に掘り込み、その後地山ブロックを含むにぶい黄褐色粘土と黒褐色粘土により交互に埋め戻されている。

寄柱穴は対となって確認された。幅1.5m、間隔は約2.1mである。特に南門跡に接する東西両方の貝立の柱穴は1.5mの間隔であることから、築地基底幅は東西いずれも1.5mであることが確定した。南門跡西側付近の寄柱穴では重複が確認されたが、東側の寄柱穴は重複が確認されなかった。寄柱穴の平面形は隅丸方形であり、規模は0.25mである。埋土は地山粒、地山ブロックを含む黒褐色粘土質シルトである。柱痕跡は径0.15～0.18mである。堆積土は地山粒を若干含む黒褐色粘土質シルトである。西側の寄柱穴柱痕跡にはわずかではあるが、焼土が含まれるものがある。

遺物は出土していない。

⑤溝 跡

SD282土取り溝跡

SB314北側で確認された築地壠跡構築のための土取り溝跡である。SD320、SX324、SB314と重複し、SD320より新しく、SX324、SB314より古い。第19次調査では長さ約26.4m確認され、西側で直角に折れ曲がり北につづく。今回の調査では3.2m分を再検出し、平面観察のみを行った。方向は南辺で計測するとE-4°-Nである。第19次調査区では築地側である南辺が直線的に掘り込まれており、北辺では出入りがみられる。第19次調査の成果を参照すると上幅は2.38～3.64m、深さは0.54mである。堆積土は上部では地山粒、炭粒をまばらに含む黒褐色粘土質シルトで、自然堆積と考えられる。下部は黒色粘土を含む明黄褐色粘土でしまりがある。人為的な埋め土と考えられる。

遺物は今回の調査では出土していない。第19次調査では1層より土師器坏、甕か壺、須恵器坏、坏蓋、甕か壺、平瓦、繩文土器、剥片が出士している。土師器坏は製作にロクロを用いるものである。須恵器坏の底部切り離しは回転糸切りによるものである。平瓦は凹面が繩タタキや繩タタキの後にナデが行われるもの、凸面は布目痕やナデが行われる。

SD311土取り溝跡

SB314北側で確認された築地壠跡構築のための土取り溝跡である。今回の調査では3.8m分を検出し、平面観察のみを行った。方向は南辺で計測するとE-5°-Nである。築地側である南辺が直線的に掘り込まれており、北辺では丸みをもつ。上幅は1.75mであり、深さは断ち割りを行っていない

で不明である。堆積土は灰黄褐色シルト、地山粒、地山ブロックをまばらに含む黒褐色粘土質シルトで自然堆積とみられ、その下部には褐色粘土、細かい地山粒、黒色土粒を多く含む黒色粘土質シルトが確認された。

遺物は出土していない。

SD284土取り溝跡

SB314南側で確認された築地跡構築のための土取り溝跡である。SD299、SD301、SD302より古い。第19次調査では長さ約27.7m確認されており、さらに西側に続く。今回の調査では2.2m分を再検出した。方向は南辺で計測するとE-4°-Nである。第19次調査の際のベルト東面を用い断面観察を行った。第19次調査区では築地側である北辺がSD301、SD302により壊されており明確ではないが、直線的に掘り込まれており、南辺はほとんどが調査区外のため明確ではない。第19次調査の成果を参照すると上幅は3.0mであり、深さは0.63mである。今回の地点での堆積土は上部では黒褐色シルト、にぶい黄褐色粘土質シルト、黒褐色粘土質シルトであり、中ほどに焼土粒がわずかに観察された。下部は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトや褐色シルトであり、人為的な埋土である。

遺物は今回の調査では出土していない。第19次調査では1~4層から土師器坏、甕、須恵器坏、高台付坏、坏蓋、甕、平瓦13点、丸瓦1点が出土している。1、2層からは製作にロクロを用いた土師器坏や土師器甕が出土している。須恵器坏の底部切り離しは回転ヘラ切りものやナデ、ケズリによる再調整が行われるものがある。

SD747土取り溝跡

SB314南東側で確認された築地跡構築のための土取り溝跡である。SD301より古い。長さ0.8m以上、幅は0.4m以上である。築地側である北辺は直線的に掘り込まれている。南辺はSD301により壊されているので不明である。堆積土は黒褐色粘土質シルト小ブロック、地山小ブロックをまばらに、炭粒をわずかに含む黒褐色粘土質シルトである。

遺物は出土していない。

SD301溝跡

調査区南側に位置する東西方向の溝跡である。SD284、SD747、SX748、SD749より新しい。調査区内で1.7m確認され、第19次調査の成果をあわせると総長は約24.7m以上となる。溝跡は調査区の東側に続く。上幅0.85m、深さは0.34mである。堆積土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。

遺物は平瓦の破片が出土している。凹面は布目痕の後にナデ、凸面は繩タタキが施される。凸面には焼土が付着する。第19次調査では須恵器坏、甕、土師器甕、平瓦、かわらけが出土している。

SD313雨落ち溝跡

調査区北側に位置する東西方向の溝跡である。SA312の北側0.9~1.3mに位置する。第19次調査では長さ6.45m確認されている。今回の調査では2.86m分を再検出した。方向は溝芯々で計測するとE-1°-Nである。幅0.27m、深さは0.10mである。底面は皿状で壁はやや急に立ち上がる。堆積土は第19次調査で完掘されており、土層注記の記録も確認されないので不明である。

遺物は出土していない。

SD749溝跡

調査区南側に位置する東西方向の溝跡である。SD301よりも古い。調査区内で1.6m確認された。溝跡は調査区の東側に続く。上幅0.42m、深さは0.03mである。堆積土は地山ブロックを多く含む黒褐色粘土質シルトである。

遺物は出土していない。

⑥掘込地業

SX748掘込地業

調査区南側に位置する溝状の落ち込みである。SD301より古い。調査区南東隅付近から確認され、SB314本柱付近でとまる。遺構は調査区南側に続く。長さ4.50m、最大幅1.44mである。深さは0.20mである。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は地山ブロック、黒色土ブロックを含む灰黄褐色粘土質シルトであり、人為的な埋土である。

遺物は出土していない。

5. 政府内郭間地区で検出された遺構と遺物

政府南辺と内郭南辺のほぼ中間地点、政府中軸線上に設けた調査区である。調査の結果、溝跡、材木列跡、土坑が確認された。精査を行った遺構について報告し、検出のみとした遺構については属性表に示すこととする。

①基本層序

確認された基本層は次のとおりである。遺構はすべてV層（地山）で確認作業を行った。遺構検出面までは深さ約0.7mである。

I層 暗褐色（10YR3/3）シルト。表土。

II層 褐色（10YR4/4）シルト。炭粒、小礫を含む。

III層 暗褐色（10YR3/4）シルト。地山粒、小礫を含む。2層と比べやわくボソボソする。

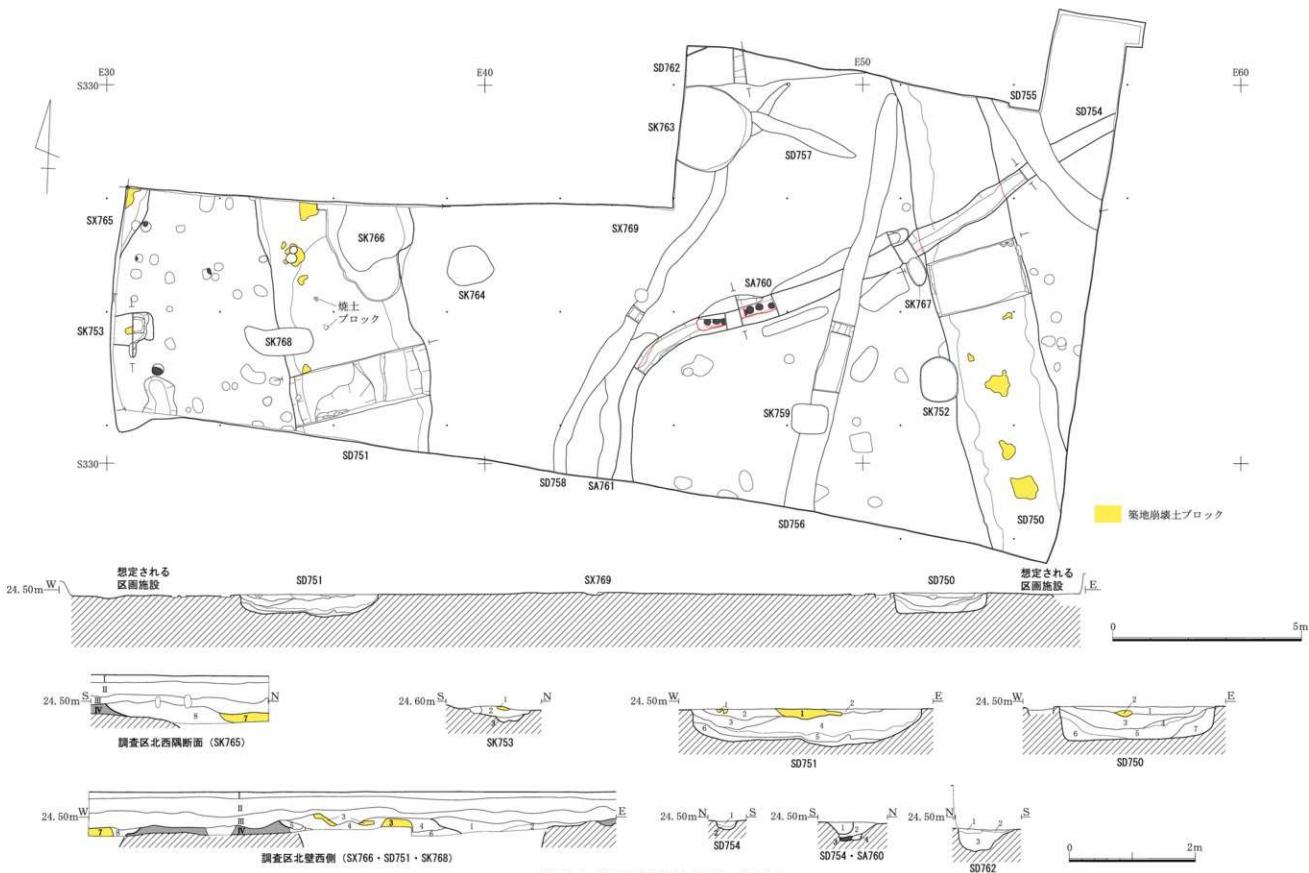
IV層 褐色（10YR4/4）シルト。地山粒、地山ブロックを含む。厚さは最大で0.15mである。古代の遺構が掘り込まれる層。古代の表土と考えられる。

V層 明黄褐色（10YR6/8）粘土質シルト。地山である。SD750やSD751の底面付近では砂や礫を含む灰黄褐色（10YR5/2）粘土である。

②溝跡

SD750溝跡

調査区東側で確認された南北方向の溝跡である。SK752、SD754、SD756と重複し、いずれよりも古い。調査区内で13.5m確認された。方向は溝芯々で計測するとN-15°-Wである。上幅2.4~2.7m、深さは0.6mである。溝跡の上幅はいずれも直線的に掘り込まれている。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。堆積土は大別4層確認された。最上層であるI層には築地崩壊土ブロックが含まれ、焼土粒、炭粒が若干含まれる褐色シルトである。築地崩壊土ブロックは大きさが0.6mほどのもので、遺構検出面に散在して分布していた。崩壊土ブロックの下に堆積するII層は焼土粒が微量含まれる暗褐



第5図 政府内郭間地区平面・断面図

第2表 政府内郭間地区検出遺構土層注記

SD750

| No. | 土色 | 土性 | 含有物など | 堆積範囲 |
|-----|-----|---------|-------------------------------|------|
| 1 | 褐色 | 10YR4/6 | シルト 地山粒、炭粒、炭化物を含む。焼土粒を極わずか含む。 | |
| 2 | 黄褐色 | 10YR5/8 | シルト 崩壊土ブロック | I層 |
| 3 | 暗褐色 | 10YR3/3 | シルト 炭粒をわずかに、焼土粒を極わずか含む。自然。 | II層 |
| 4 | 暗褐色 | 10YR3/4 | シルト 炭粒、地山粒をわずかに含む。自然。 | |
| 5 | 黒褐色 | 10YR2/3 | シルト 炭粒、地山粒をわずかに含む。自然。 | III層 |
| 6 | 黒褐色 | 10YR3/2 | シルト 炭粒をまばらに含む。自然。 | |
| 7 | 暗褐色 | 10YR3/3 | シルト 地山ブロックを多く含む。人為。 | IV層 |

SD751

| No. | 土色 | 土性 | 含有物など | 堆積範囲 |
|-----|-----|---------|----------------------|------|
| 1 | 暗褐色 | 10YR3/3 | シルト 地山ブロックを含む。 | |
| 2 | 暗褐色 | 10YR3/3 | シルト 炭化物、焼土、地山粒を多く含む。 | I層 |
| 3 | 褐色 | 10YR4/4 | シルト 地山粒、炭粒、焼土粒を含む。 | II層 |
| 4 | 暗褐色 | 10YR3/4 | シルト 地山粒、炭粒を含む。 | III層 |
| 5 | 黒褐色 | 10YR2/3 | シルト | |
| 6 | 暗褐色 | 10YR3/3 | シルト 地山ブロックを多く含む。人為。 | IV層 |

SK753

| No. | 土色 | 土性 | 含有物など | 堆積範囲 |
|-----|-----|---------|-----------------------------------|------|
| 1 | 暗褐色 | 10YR3/3 | シルト 明黃褐色(10YR6/8) 粘土の互層、かたい、築地崩壊土 | |
| 2 | 暗褐色 | 10YR3/3 | シルト 炭粒、焼土粒、地山粒を含む | |
| 3 | 暗褐色 | 10YR3/2 | シルト 地山粒を多く含む。 | |

SD754

| No. | 土色 | 土性 | 含有物など | 堆積範囲 |
|-----|-----|---------|-------------|------|
| 1 | 暗褐色 | 10YR3/4 | シルト | |
| 2 | 暗褐色 | 10YR3/4 | シルト 地山粒を含む。 | |

SD754・SA760

| No. | 土色 | 土性 | 含有物など | 堆積範囲 |
|-----|-----|---------|---------------------------|-------|
| 1 | 暗褐色 | 10YR3/3 | シルト 地山粒を含む。 | SD754 |
| 2 | 暗褐色 | 10YR3/4 | シルト 地山ブロック、灰白色火山灰ブロックを含む。 | 抜き取り |
| 3 | 褐色 | 10YR4/4 | シルト 地山粒を含む。 | 柱痕跡 |
| 4 | 暗褐色 | 10YR3/4 | シルト 地山ブロックを含む。 | 削り方 |

SD762

| No. | 土色 | 土性 | 含有物など | 堆積範囲 |
|-----|-----|---------|------------------|------|
| 1 | 暗褐色 | 10YR3/4 | シルト 地山ブロックを多く含む。 | |
| 2 | 暗褐色 | 10YR3/3 | シルト | |
| 3 | 褐色 | 10YR4/4 | シルト 地山粒を含む。 | |

調査区北壁・北西隅

| No. | 土色 | 土性 | 含有物など | 堆積範囲 |
|-----|-----|---------|-----------------------------|-------|
| 1 | 褐色 | 10YR4/4 | シルト 地山粒、焼土粒、炭粒を含む。 | |
| 2 | 暗褐色 | 10YR3/4 | シルト 地山ブロックを含む。 | SK766 |
| 3 | 褐色 | 10YR4/4 | シルト 地山ブロックを含む(築地崩壊土ブロック)。 | |
| 4 | 褐色 | 10YR4/4 | シルト 地山粒、炭粒、焼土粒を含む。 | SD751 |
| 5 | 暗褐色 | 10YR3/4 | シルト 地山粒、炭粒を少量含む。 | |
| 6 | 黒褐色 | 10YR2/3 | シルト | |
| 7 | 暗褐色 | 10YR3/3 | シルト 地山ブロックを多く含む(築地崩壊土ブロック)。 | SK765 |
| 8 | 褐色 | 10YR4/4 | シルト 地山粒、炭粒を多く、焼土を少量含む。 | |

色シルトである。III層は炭粒を若干含む黒褐色シルトであり、自然堆積と考えられる。IV層は東側の壁際にみられるもので地山ブロックを含む暗褐色シルトである。人為的な埋土と考えられる。

遺物はI層、II層より須恵器壺、坪蓋、甕、土師器甕、平瓦が若干出土している。いずれも破片の

ため特徴は不明である。土師器甕は内面にハケメやナデのものであり、製作にロクロは用いられていないとみられる。

SD751溝跡

調査区西側で確認された南北方向の溝跡である。SK766、SK768と重複し、いずれよりも古い。調査区内で6.5m確認された。方向は溝芯々で計測するとN・14°・Wである。上幅3.4～3.7m、深さは0.5～0.7mである。溝跡の上幅はいずれも直線的に掘り込まれている。底面は凹凸があり、壁は西側では急に、東側ではゆるやかに立ち上がる。堆積土は大別4層確認された。最上層であるI層は築地崩壊土ブロックが含まれ、焼土、炭化物が含まれる褐色シルトである。築地崩壊土ブロックは大きさが0.5mほどのもので、遺構検出面に散在して分布していた。崩壊土ブロックの下に堆積するII層は暗褐色シルトであり、焼土粒が微量含まれている。III層は炭粒を若干含む黒褐色シルトであり、自然堆積と考えられる。IV層は底面付近にみられるもので地山ブロックを含む暗褐色シルトである。人為的な埋土と考えられる。

遺物はI～III層より須恵器坏、甕、瓶、土師器坏、甕、墨書き器、平瓦、焼けた壁材が若干出土している。須恵器坏の底部切り離しは小破片のため明確ではないが、回転ヘラ切りのものと回転ヘラケズリのものがある。墨書きは須恵器坏底面に記されるが、小破片のため判読できない。土師器坏は小破片だが、有段のもので外面はヘラケズリ、内面は黒色処理・ヘラミガキが施されている。

SD754溝跡

調査区東から中央にかけて弧状に確認された溝跡である。SD750、SA760、SA761より新しく、SD755、SD756、SK767より古い。東西方向に約14mのび、ゆるやかに南に折れ曲がり3mのびる。遺構は調査区の東側と南側に続く。方向は溝芯々で計測すると東西方向でN・60°・E、南北方向でN・6°・Eである。上幅0.6m、深さ0.15mである。底面は皿状で壁はやや急に立ち上がる。堆積土は地山粒を含む暗褐色シルトで、自然堆積と考えられる。

遺物は土師器小片が出土している。

SD762溝跡

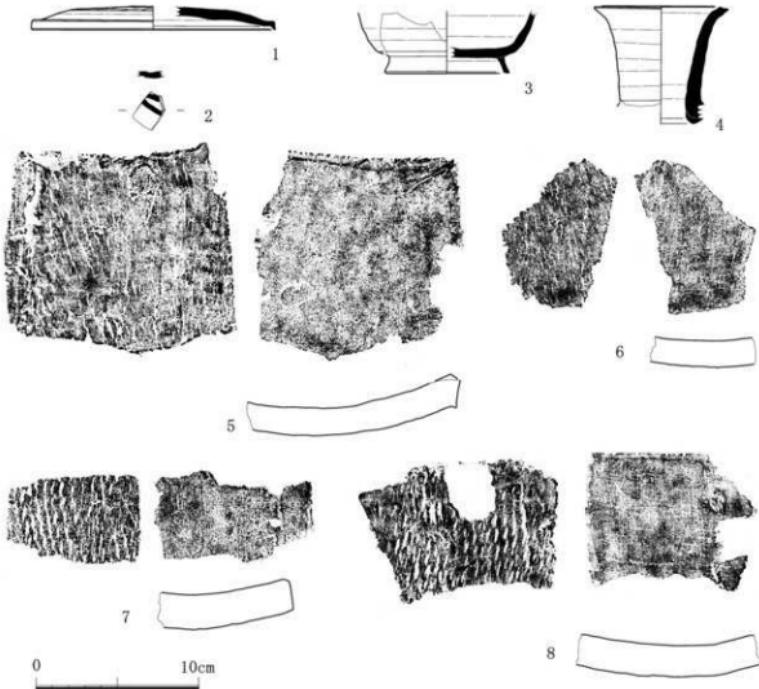
調査区中央北側で確認された東西方向の溝跡である。SD758、SK763より古い。調査区内で7.2m確認された。調査区の東側と西側に続く。方向は南側上幅で計測するとE・13°・Nである。上幅1.0m、深さは0.35mである。底面はほぼ平坦で、北壁は急に、南壁はゆるやか立ち上がる。堆積土は地山粒を含む暗褐色シルトや褐色シルトで、自然堆積と考えられる。

遺物は須恵器甕か壺の体部破片が出土している。外面はロクロナデ、ヘラケズリ、内面はロクロナデが施される。

③木材列壙跡

SA760木材列壙跡

調査区東から中央にかけて確認された。SD754、SD756より古い。SD750西辺より0.5m西に離れた地点から始まり西に約6mのびてとまる。方向は掘り方芯々で計測するとN・63°・Eである。上部は上幅0.6mの抜き取り痕跡である。堆積土は地山ブロック、灰白色火山灰ブロックを含む暗褐色シルトである。抜き取り痕跡の下部で木材列壙跡の掘り方と柱痕跡を確認した。掘り方の規模は幅0.4mであ



| 番号 | 遺構名 | 層位 | 種別 | 器種 | 特徴 | 登録 | 写真 |
|----|-------|----|-----|------|--|------|-----|
| 1 | SD750 | 1層 | 須恵器 | 壺類 | 残存: 1/3。器高: 1.4cm以上。口径: 14.8cm。外面: ロクロナデの後、回転ヘラケズリ。灰色 (N5/0)。内面: ロクロナデ。灰色 (5Y5/1)。 | R003 | |
| 2 | SD751 | 4層 | 須恵器 | 壺類 | 残存: 底部小破片。底部: 回転ヘラ切り。灰色 (5Y7/1)。内面: ロクロナデ。灰色 (5Y7/1)。底に墨書き。 | R006 | 図版8 |
| 3 | SD751 | 4層 | 須恵器 | 高台付壺 | 残存: 体下部~底部。器高3.8cm以上。底径: 7.5cm。外面: ロクロナデ。灰色 (5Y6/1)。底部: 回転ヘラケズリ。ナデ。内面: ロクロナデ。灰色 (5Y6/1)。 | R005 | |
| 4 | SD751 | 1層 | 須恵器 | 瓶類 | 残存: 口縁部~頸部。器高7.2cm以上。口径: 7.2cm。外面: ロクロナデ。自然袖。灰白 (N7/0)。内面: ロクロナデ。自然袖。2段接合。 | R004 | |
| 5 | SD750 | 1層 | 瓦 | 平瓦 | 残存: 構角部。凹面: 布目の後ナデ。色調: 灰色 (N5/0~6/0)。凸面: 繩タタキ。四型台压痕。ナデ。灰色 (N5/0~6/0)。側面・小口面: ヘラケズリ。 | R001 | 図版8 |
| 6 | SD750 | 3層 | 瓦 | 平瓦 | 残存: 一部。凹面: 布目の後ナデ。褐灰色 (10YR4/1)。凸面: 繩タタキの後ナデ。にぶい黄橙色 (10YR7/2)。~灰黄褐色 (10YR6/2)。 | R002 | |
| 7 | SD751 | 4層 | 瓦 | 平瓦 | 残存: 凹面: 布目の後ナデ。灰黄色 (2.5Y7/2)。凸面: 繩タタキ。四型台压痕?。灰白色 (2.5Y8/1)。小口面: ヘラケズリ | R007 | 図版8 |
| 8 | SD751 | 3層 | 瓦 | 平瓦 | 残存: 凹面: 布目の後ナデ。暗灰色 (N3/0)。凸面: 繩タタキ。ナデ。灰色 (5Y6/1)。側面: ヘラケズリ。 | R008 | |

第6図 SD750・SD751出土遺物

第3表 溝跡遺構属性表

| 種類 | 特徴 | 重複 |
|-------|---|-----------------------------------|
| SD755 | 南北溝。長さ:4.1m。幅:0.80m。堆積土:炭粒、焼土粒を含む暗褐色(10YR3/4)シルト。出土遺物:なし。 | SD754→SD755 |
| SD756 | 南北溝。長さ:11.2m以上。幅:0.77m。深さ:0.10m。堆積土:地山ブロックを含む暗褐色(10YR3/3)シルト。出土遺物:なし。 | SD750、SD754、SA760 →SD757→SK759 |
| SD757 | 東西溝。長さ:3.00m。幅:0.42m。堆積土:地山ブロックを含む黒褐色(10YR2/3)シルト。出土遺物:なし。 | SD758→SD757→SK763 |
| SD758 | 南北溝。長さ:12.1m以上。幅:0.58m。深さ:0.06m。堆積土:地山粒を含む暗褐色シルト。出土遺物:なし。 | SD762→SD758→ SD757、SK763 |

る。検出面からの深さは0.28mである。底面は平坦で壁は垂直に立ち上がる。埋土は地山ブロックを含む暗褐色シルトである。柱痕跡は径0.2mで、密に分布している。堆積土は地山粒を含む褐色シルトである。

遺物は出土していない。

SA761木材列壠跡

調査区中央において弧状に確認された。SD754、SD758より古い。SA760の西延長線上、SA760西端より約1m離れた地点から始まり、ゆるやかに弧を描きながら4m以上なのび、調査区の南側に続く。方向は抜き取り痕跡の想定される芯々で計測するとN-8°-Eである。上幅は0.3~0.6m以上である。検出面の堆積土は地山ブロック、灰白色火山灰ブロックを含む暗褐色シルトである。

遺物は出土していない。

④土坑

SK753土坑

調査区西端で確認された。調査区西側につづく。平面形は隅丸長方形である。規模は長軸1.04m以上、短軸0.95m、深さは0.25mである。底面は凹凸があり、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は上部に築地崩壊土ブロックが含まれ、焼土粒、炭粒、地山粒を含む暗褐色シルト、下部は地山粒を多く含む暗褐色シルトであり、人為的な埋土とみられる。

遺物は上部より須恵器坏、双耳坏、高台付坏、土師器坏、甕などが出土している(第7図1~4)。土師器坏体部破片は磨滅のため明確ではないが、製作にロクロを用いている可能性がある。土師器甕は外面が横ナデ、ハケメ、内面がハケメが行われており、胎土に白針が含まれている。

⑤性格不明遺構

SX765性格不明遺構

調査区北西端で確認された。調査区北西側につづく。平面形は東辺のみの確認のため不明である。規模は長軸1.75m以上、短軸0.60m、深さは掘り下げを行っておらず不明である。堆積土は築地崩壊土ブロックが含まれ、焼土粒、炭粒、地山粒を含む褐色シルトである。

遺物は土師器坏、甕の小破片が出土している。土師器坏はマメツが著しい。土師器甕の外面はヘラケズリ、ハケメ、内面はハケメやナデが施されており、製作にロクロは用いられないとみられる。

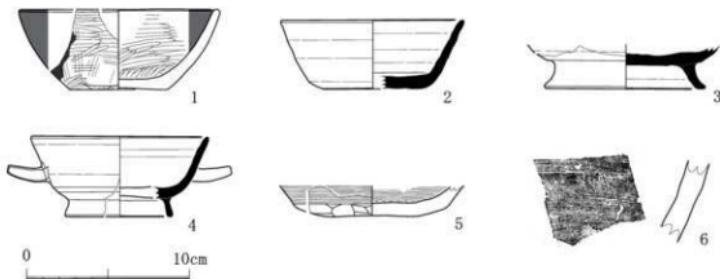
⑥遺構外出土遺物

表土より須恵器坏、坏蓋、高台付坏、甕、土師器甕が出土した。ほとんどのものが小片であるが、特徴の分かるものでは、須恵器坏では底部切り離しが回転ヘラケズリのもの、須恵器甕では4本単位

の範書き波状文をもつ口縁部破片が出土している。土師器壺は製作にロクロを用いないものとみられ、口縁部破片では横ナデ、体部破片ではハケメが行われている。

第4表 土坑遺構属性表

| 種類 | 特徴 | 重複 |
|-------|---|---------------------------|
| SK752 | 平面形: 暗褐色。長軸: 1.18m。短軸: 0.98m。堆積土: 地山ブロックを含む暗褐色(10YR3/3)シルト。出土遺物: 須恵器壺、甌、土師器片。 | SD750→SK752 |
| SK759 | 平面形: 暗褐色。長軸: 0.96m。短軸: 0.80m。堆積土: 地山粒、焼土粒を含む暗褐色(10YR3/4)シルト。出土遺物: なし。 | SD756→SK759 |
| SK763 | 平面形: 円形。長軸: 2.24m。短軸: 1.7m以上。堆積土: 小繭を多く含む褐色(10YR4/4)シルト。出土遺物: 須恵器甌。 | SD757, SD758, SD762→SK763 |
| SK764 | 平面形: 楕円形。長軸: 1.24m。短軸: 1.00m。堆積土: 地山粒を若干含む暗褐色(10YR3/4)シルト。出土遺物: なし。 | — |
| SK766 | 平面形: 円形。長軸: 2.0m、短軸: 1.7m以上。堆積土: 地山粒、焼土粒、炭粒を含む褐色(10YR4/4)シルト。地山小ブロックを含む暗褐色(10YR3/3)シルト。出土遺物: 須恵器壺、高台付壺、甌、土師器甌、中世陶器擂鉢、かわらけ皿、鉄製品。 | SD751→SK766 |
| SK767 | 平面形: 楕円形。長軸: 0.75m。短軸: 0.45m。堆積土: 暗褐色(10YR3/3)シルト。出土遺物: なし。 | SD754→SK767 |
| SK768 | 平面形: 暗褐色。長軸: 1.74m。短軸: 0.72m。堆積土: 焼土粒、地山粒を含む褐色(10YR4/4)シルト。 | SD751→SK768 |



| 番号 | 遺構名 | 層位 | 種別 | 器種 | 特徴 | 登録 | 写真 |
|----|-------|-----|------|------|---|------|-----|
| 1 | SK753 | 2層 | 土師器 | 壺 | 残存: 1/3。器高4.9cm。口径: 12.0cm底径: 6.0cm。外面: ハケメの後ヘラミガキ。外面下端手持ちヘラケズリ。黒色処理。底部: ヘラケズリの後ヘラミガキ。内面: ヘラミガキ、黒色処理。 | R012 | 図版8 |
| 2 | SK753 | 2層 | 須恵器 | 壺 | 残存: 2/5。器高4.2cm。口径: 10.4cm。底径: 5.6cm。外面: ロクロナデ。にぶい黄褐色(10YR7/2)~灰白色(10YR8/2)。底部: 回転ヘラ切りの後ナデ。内面: ロクロナデ。灰白色(10YR8/1~8/2)。 | R009 | 図版8 |
| 3 | SK753 | 2層 | 須恵器 | 高台付壺 | 残存: 底部。器高2.7cm以上。底径: 9.6cm。外面: ロクロナデ。灰白色(2.5Y8/1)。底部: 回転ヘラケズリ。内面: ロクロナデ。灰白色(2.5Y8/1)。 | R011 | |
| 4 | SK753 | 2層 | 須恵器 | 双耳壺 | 残存: 1/4。器高4.9cm。口径: 10.7cm。底径: 6.4cm。外面: ロクロナデ。耳の長さ: 2.4cm。耳の幅: 1.2cm。耳の厚さ: 0.8cm。灰色(5Y5/1)。耳部: ヘラケズリ。底部: 切り離し不明。内面: ロクロナデ。灰色(5Y6/1)。 | R010 | 図版8 |
| 5 | SK766 | 堆積土 | かわらけ | 皿 | 残存: 底部。器高1.9cm以上。底径: 5.6cm。外面: 横ナデ。にぶい黄褐色(10YR7/3)。底部: ナデ。内面: 見込み部分をナデの後横ナデ。橙色(7.5YR7/6)。 | R013 | |
| 6 | SK766 | 堆積土 | 中世陶器 | 擂鉢 | 残存: 体部。外面: 横ナデ。にぶい黄褐色(10YR6/4)。内面: 横ナデ。灰黃褐色(10YR6/2)。 | R014 | |

第7図 SK753・SK766出土遺物

6. 考 察

①政庁南門地区

【政庁南門跡及び築地堀跡の構造について】

政庁南門跡および目隠し堀跡について柱穴の平面形、埋土、断面、底面の状況について再調査を行ったところ、いずれも3時期の掘り方が確認された。政庁南門跡SB314c本柱（P3、P6）の柱穴掘り方埋土にごくわずかながら焼土粒が含まれていたことから、政庁内の主要な建物跡と同様に火災の後に同位置に再建されており、火災後の政庁の規模が火災前の規模と変わらないことが確定した。なお、SB314cの掘り方埋土には焼土がごくわずかに混入するという状況が確認されるとともにSB314付近の築地構築のための土取り溝跡（SD284、311）も焼土粒がわずかに含まれる程度であったことから、SB314、SA312周辺の構造物は火災による影響がほとんどなかった可能性も考えられる。

SB314a、b、cの構造はいずれも門の扉が取り付く本柱の柱穴が浅く（底面レベル約23.7～23.9m）、本柱以外の柱穴が深い（底面レベル約23.5～23.6m）。このことから、SB314は本柱以外の柱穴で門の上部を支える構造であることが判明した。

SB314c柱穴はb柱抜き取り穴を利用し、これを拡張して造営されたと想定される。c柱抜き取り穴の位置と想定されるb柱痕跡の位置は断ち割りを行ったP6ではほぼ同位置とみられ、P4ではb柱穴底面が窪み、柱があったと想定される部分とc抜き取り痕跡はややずれるが、ほぼ同位置で同規模の建て替えと想定される。a期についてはb、c期の柱穴に破壊され柱痕跡の位置が明確ではないが、残存する柱穴からほぼ同位置と考えられる。規模については同規模があるいは東側及び西側の柱列がb、c期と比べると内側の位置にあると推定されることから、本柱の柱間寸法は短い可能性も想定される（第8図）。

SA312はSB314北側柱列と並行している。c期ではSB314北側柱列の北約3.6mに位置し、b期はc期とほぼ同位置と想定される。a期はSB314北側柱列より北に3.3mの位置と想定され、b、c期と比較するとSB314に近い位置関係がある。また、SA312cの北側0.9～1.3mの地点には目隠し堀跡にかかる雨落ち溝跡（SD313）がある。SD313の方向はSA312b、cとほぼ同じであることから、SD313はSA312cないしはSA312bに伴うものと考えられる。SA312aに伴う雨落ち溝は本来存在していたのであろうが、削平により確認されなかつた可能性が考えられる。

築地堀跡は確認された寄柱穴の位置から東西とともにSB314妻側の棟通りにとりつく。また、SB314西側の寄柱穴では重複が認められた。これはSB314の規模が西に拡大したことにかかるものと考えられ、SB314西側の築地堀跡は部分的に作り直しがあった可能性が考えられる。

第19次調査及び今回の調査で確認された政庁南辺築地堀跡本体の基底幅は寄柱穴の幅から1.5m、東西の間隔は約2.1mである。また、政庁の内側と外側の土取り溝跡は築地本体が想定される寄柱穴から約1.4mの間隔を保ち、築地側の上幅が直線的に掘り込まれていることが再確認された。築地本体と土取り溝跡間が犬走りであったと考えられている（第9図）。

平安時代に編纂された『延喜式』巻34木工寮式築垣条には以下のように記されている（黒板勝美1955、宮多研2001、盛岡市教育委員会2000）。

「築垣」

高一丈三尺。本径六尺。末径四尺。長一丈築工十三人。上土夫四人半。

高一丈二尺。本径五尺六寸。末径三尺六寸。長一丈。工十一人。夫四人。

高一丈一尺五寸。本径五尺五寸。末径三尺五寸。長一丈。工九人。夫三人。

高一丈。本径四尺五寸。末径三尺。長一丈。工四人半。夫二人半。

高九尺。本径四尺。末径二尺六寸。長一丈。工四人半。夫二人。

高八尺。本径四尺。末径二尺六寸。長一丈。工四人。夫一人。

高七尺。本径三尺。末径二尺。長一丈。工二人半。夫一人。」

この記事を参考にすると伊治城跡政府南辺の築地塀本体は「高一丈一尺五寸 本径五尺五寸 末径三尺五寸」ないしは「高一丈 本径四尺五寸 末径三尺」のいずれかの規模になり、築地塀本体上面の幅（末径）が約0.9～1.05m、高さは3～3.45mになると思われる。外郭南辺で確認されたSF676に接続するSF680は積み手の違いと寄柱穴から基定幅は2.8m前後と想定されている。『延喜式』巻34木工寮式築垣条にみえる最も規模の大きい築垣（本径6尺）より基底幅が大きいことから、高さは1丈3尺（約3.9m）以上であることが考えられる。内郭築地塀跡の詳細は明確ではない。このことから、政府、内郭、外郭における築地塀跡本体の基底幅の確認とそれから想定される築地塀跡の規模の比較については今後の課題である。

【政府域の構造と変遷について】

第19次調査報告書で示された政府の規模と変遷案を参考とし、今回新たに判明したことを追加すると、政府の規模や変遷は次のようになる（第10図）。

政府の規模は南北約61m、東西は東辺が確認されていないことから54～58mと推定され、周囲を築地塀で区画し、内部に基本的構成要素である正殿、脇殿（註1）、南門、目隠し塀、後殿、前庭と準構成要素であるそのほかの建物から構成される。このほか、これまで未調査ではあるが、基本的構成要素として東西の門が存在すると考えられる。

《I 期》

正殿を中心に、その南に前殿、北に後殿が建ち、前殿の前方にそれぞれ1棟の脇殿（西脇殿のみ確認）がある。前殿の南には内部の視野を遮断する目隠し塀跡、さらにその南に南門が開いており、その東西両妻から政府南辺を区画する築地塀跡がのびる。

《II 期》

I期の政府を改修したもので正殿、脇殿、後殿、南門、目隠し塀は前期の建物を踏襲してそれぞれ同位置に同規模で建て替えられている。一方、I期にみられた前殿はこの時期まで継続せず、正殿、脇殿、目隠し塀跡で囲まれた約30m四方の前庭となる。

政府後方の使われ方はI期とは大きく異なり、新たに、東側にSB236a、西側にSB237がそれぞれ建てられる。伊治城跡の政府の施設が最も整備された時期である。

「築垣」

高一丈三尺。本径六尺。末径四尺。長一丈築工十三人。上土夫四人半。

高一丈二尺。本径五尺六寸。末径三尺六寸。長一丈。工十一人。夫四人。

高一丈一尺五寸。本径五尺五寸。末径三尺五寸。長一丈。工九人。夫三人。

高一丈。本径四尺五寸。末径三尺。長一丈。工四人半。夫二人半。

高九尺。本径四尺。末径二尺六寸。長一丈。工四人半。夫二人。

高八尺。本径四尺。末径二尺六寸。長一丈。工四人。夫一人。

高七尺。本径三尺。末径二尺。長一丈。工二人半。夫一人。」

この記事を参考にすると伊治城跡政府南辺の築地塀本体は「高一丈一尺五寸 本径五尺五寸 末径三尺五寸」ないしは「高一丈 本径四尺五寸 末径三尺」のいずれかの規模になり、築地塀本体上面の幅（末径）が約0.9～1.05m、高さは3～3.45mになると思われる。外郭南辺で確認されたSF676に接続するSF680は積み手の違いと寄柱穴から基定幅は2.8m前後と想定されている。『延喜式』巻34木工寮式築垣条にみえる最も規模の大きい築垣（本径6尺）より基底幅が大きいことから、高さは1丈3尺（約3.9m）以上であることが考えられる。内郭築地塀跡の詳細は明確ではない。このことから、政府、内郭、外郭における築地塀跡本体の基底幅の確認とそれから想定される築地塀跡の規模の比較については今後の課題である。

【政府域の構造と変遷について】

第19次調査報告書で示された政府の規模と変遷案を参考とし、今回新たに判明したことを追加すると、政府の規模や変遷は次のようになる（第10図）。

政府の規模は南北約61m、東西は東辺が確認されていないことから54～58mと推定され、周囲を築地塀で区画し、内部に基本的構成要素である正殿、脇殿（註1）、南門、目隠し塀、後殿、前庭と準構成要素であるそのほかの建物から構成される。このほか、これまで未調査ではあるが、基本的構成要素として東西の門が存在すると考えられる。

s T @ ø t

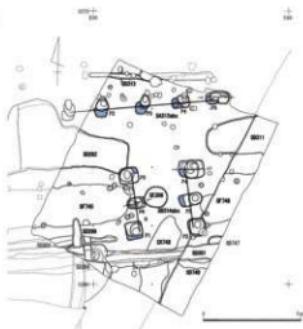
正殿を中心に、その南に前殿、北に後殿が建ち、前殿の前方にそれぞれ1棟の脇殿（西脇殿のみ確認）がある。前殿の南には内部の視野を遮断する目隠し塀跡、さらにその南に南門が開いており、その東西両妻から政府南辺を区画する築地塀跡がのびる。

s U @ ø t

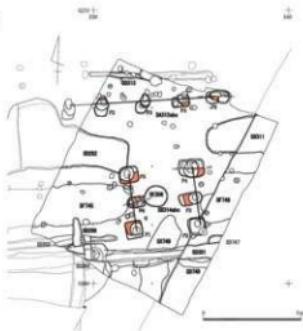
I期の政府を改修したもので正殿、脇殿、後殿、南門、目隠し塀は前期の建物を踏襲してそれぞれ同位置に同規模で建て替えられている。一方、I期にみられた前殿はこの時期まで継続せず、正殿、脇殿、目隠し塀跡で囲まれた約30m四方の前庭となる。

政府後方の使われ方はI期とは大きく異なり、新たに、東側にSB236a、西側にSB237がそれぞれ建てられる。伊治城跡の政府の施設が最も整備された時期である。

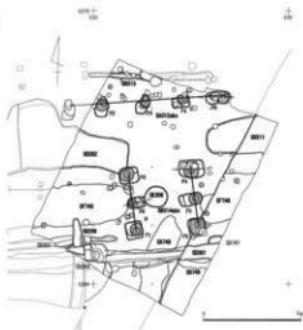
《政庁Ⅰ期》



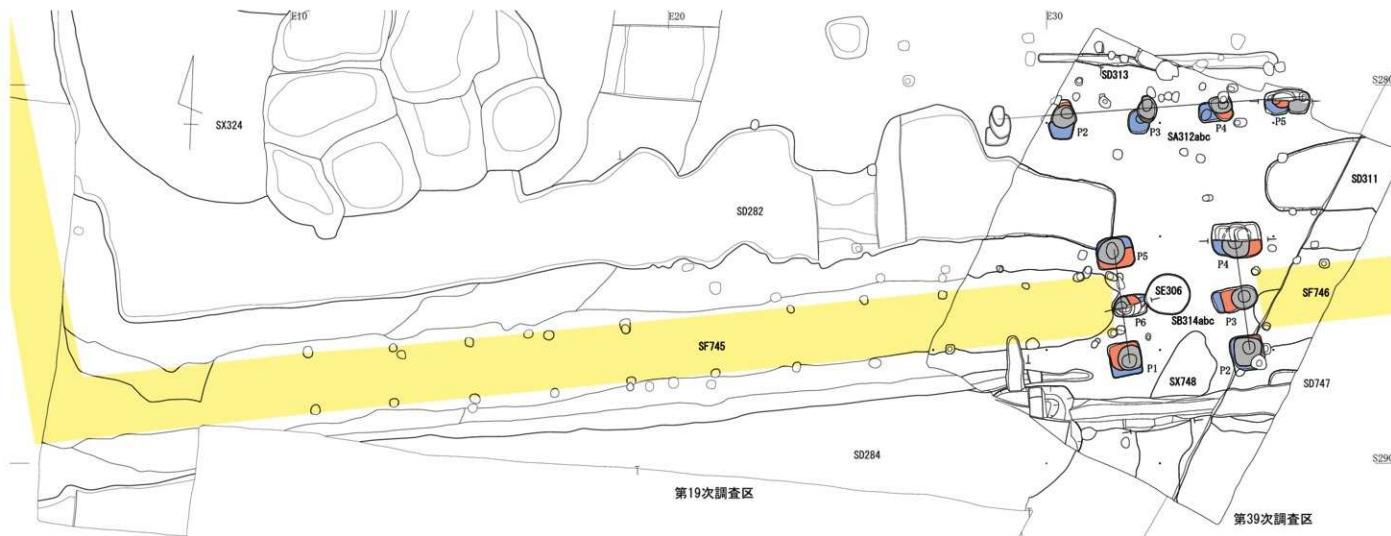
《政庁Ⅱ期》



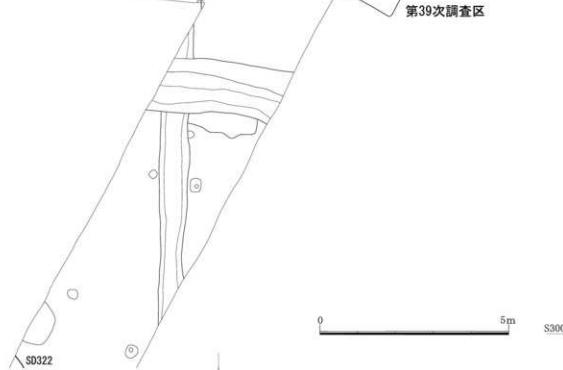
《政庁Ⅲ期》



第8図 政庁南門跡・目隠し塙跡の変遷



第9図 政府南辺築地塚跡

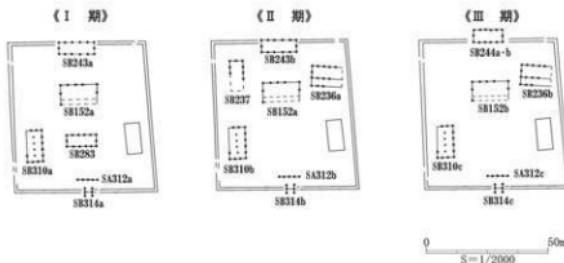


これらの建物跡は火災により消失しており、これは宝亀11年（780）「伊治公皆麻呂の乱」に起因すると考えられる。

《III 期》

火災後に復興されたものであり、建物跡の基本的な配置はII期と大きく変わらず、正殿、西脇殿、南門、目隠し塀は前期の建物を踏襲してそれぞれ同位置に同規模で建て替えられている。

一方、後殿はII期のSB243の桁行を若干縮小し、2間分北に移動して建てられている。後殿はその後再度建て替えられる。正殿後方建物群は東側のSB236Bが同位置に同規模で建て替えられる。



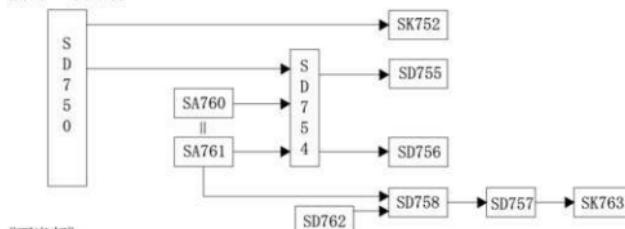
第10図 政府の変遷

②政庁内郭間地区

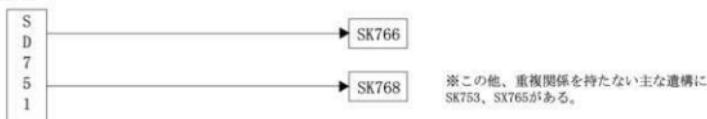
【重複関係】

政庁内郭間地区で確認された主な遺構の重複関係は第11図のとおりである。

《東半～中央部》



《西半部》



第11図 政府内郭間地区における遺構の重複関係

確認された遺構のうち、重複関係、出土遺物、堆積土の状況から古代のものと考えられるものはSD750、SD751であり、これまで確認されている伊治城跡の政府及び内郭区画施設の方向と同じである

ことから伊治城期の遺構と考えられる。このほか年代の分かる遺構には10世紀前半のものと考えられるSA760、SA761がある。堆積土から中世陶器、かわらけが出土したSK768は中世以降のものと考えられる。

【SD750・SD751溝跡について】

調査区内で南北方向の溝跡が並行して2条確認された。溝跡の方向は政府中軸線や内郭東辺及び西辺の方向と同じである。溝跡の間隔は溝跡の内側で計測すると13.8~14m、溝跡芯々で計測すると約16.6mである。この地点では路面は確認されなかったが、現在のところ未検出の内郭南門から政府南門に至る道路跡（SX769南大路）と想定され、SD750、SD751は道路側溝を兼ねていたと考えられる。

確認されたSD750、751の上幅の形態をみると東西の上幅はいずれも直線的である。断面形態をみるとSD750では壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦であり、SD751では壁は西側ではほぼ垂直に立ち上がり、東側ではやや急にたちあがり、底面に凹凸が著しいと特徴をもつ。いずれの溝跡も底面ないしは壁付近は地山ブロックを含む黒褐色土シルトで人為的な埋土であり、その後、自然堆積とみられる黒褐色土が堆積した後に築地崩壊土ブロックが含まれる暗褐色シルトにより埋め戻されたと考えられる。

伊治城跡内で特徴が類似している溝跡としては政府、内郭、外郭で確認されている区画施設構築のための土取り溝があげられる。これまで確認されている土取り溝跡は築地跡の両側に確認されており、そのほとんどは築地跡が想定される一側縁が直線状をなすが、片側が不整形をしており、底面は凹凸がみられる（註2）。確認されたSD750、SD751はこれまで確認されている土取り溝跡とは形態が異なるが、SD750、SD751と同様にいずれの上幅も直線状となっている土取り溝としては内郭南東隅で検出されているSD330、SD331、政府南側で確認されているSD322、SD702があげられる。

SD750は検出された位置や底面の状況、堆積土の特徴からSD702の南側へのつづきであり、SD751を北に伸ばすとSD322と直交する位置関係をもつと想定される。SD751とSD322の底面はともに凹凸を持つとともに、検出面では焼土、炭化物粒とともに築地崩壊土ブロックが含まれており、SD751とSD322は同じ特徴を持つ遺構といえる。SD322は区画施設構築のための土取り溝であり、SD322の南側に区画施設が存在したと想定されており、SD751は西側に区画施設が存在したと考えられる。また、SD702は北側で確認されたSD700、SD701とのかかわりから同一の基準により造営されたと考えられており、SD700、SD701間に区画施設が想定されるので、SD702=SD750の東側に区画施設が存在すると考えられる。なお、想定される区画施設の位置において寄柱等のピットについて検討を行ったが、SD750東側では調査区の中では確認できず、SD751西側では南北に並ぶピットが2条確認されたが、古代のものかは確認できなかった。

SD751の約3m西に離れた位置にあるSK753は焼土や炭化物、築地崩壊土ブロックが含まれることから、区画施設構築のための土取り穴か火災後の残滓を廃棄した土坑と考えられる。出土遺物には製作にロクロを用いた土師器は出土していない。また、SK753出土の須恵器双耳环耳部は幅が狭く、短いものであり、蓋Gが出土したことから8世紀末から9世紀初頭と考えられているSI173出土の双耳环の耳部は幅がひろく、長いという形態とは異なり、8世紀後半と考えられるSI1725出土の双耳环の形態と類似する。のことから、SK753は8世紀後半のものと考えられる。SK753は検出面より約0.2mの深さ

しかない。第19・20次調査ではSD322の南側で土取り穴は確認されていないが、これは遺構の深さがあまりないために削平され、確認されなかつた可能性も考えられる（註3）。

SD322の年代は政庁Ⅰ期と想定されているSB344よりも新しいこと、火災後に政府が南に拡張すると考えられたことから、政庁Ⅲ期に位置付けられてきた。SD700、SD701、SD702については遺構の特徴や堆積土中に炭粒や焼けた壁や焼土ブロックが含まれていたこと、SD701がSD322の東延長上に位置することから、SD322と同様に政庁Ⅲ期に位置付けられると考えられていた。一方、今回確認されたSD751では築地崩壊土ブロックとともに焼土粒、炭化物が含まれており、さらに何らかの構造物にかかわるとみられる焼けた壁材が出土している。SD751は堆積土の状況から火災の後に人為的に埋め戻されたと考えられる。築地崩壊土下の堆積土からは出土遺物は少ないが、製作にロクロを用いた土器が含まれていないことから、SD751で確認された焼土、炭化物、築地崩壊土が堆積した年代は宝亀11年（780）「伊治公皆麻呂の乱」にかかわることが想定され、SD751の構築年代は政庁Ⅱ期までさかのぼる可能性が考えられる。SD322も同様の年代を想定できると考えられる。また、SD750も築地崩壊土ブロックが含まれ、わずかに焼土粒、炭粒が含まれている。このことからSD322、SD701とSD700、SD702=SD750についても構築年代は政庁Ⅱ期までさかのぼることが考えられる。さらに政府内郭間地区においてはSD750、SD751よりも古い道路跡にかかわる遺構は確認されなかつた。創建段階の遺構はSD750、SD751によって壊された、あるいはSD750、SD751の造営年代が政庁Ⅱ期以前となる可能性もありうる。なお、政府内郭間地区ではSD751が確認されている西側で遺構や表土中に焼土が顕著にみられ、SD750が確認された東側では遺構や表土中に焼土がほとんどみられない状況であった。

以上の可能性を踏まえて想定すると、政庁南面の内郭内部にはSD322、SD751及びその南と西を囲む築地崩跡ないしは版築土塁（仮称政庁前西官衙）とSD700、SD702=SD750及びその南と東を囲む築地崩跡ないしは版築土塁（仮称政庁前東官衙）で区画される官衙ブロックが存在する可能性が考えられる（第12、14図）。想定される官衙ブロックの範囲は内郭区画施設までのびると仮定すると南北80m、東西80mの規模をもつこととなり、政庁南面に位置する2つの官衙ブロックは密接にかかわるものと想定される。伊治城跡は政庁、内郭、外郭南辺の区画施設が築地崩跡であり、第33次調査では外郭南辺から内郭西辺の方向にのびる築地崩跡ないしは版築土塁が確認されている。さらに内郭内の官衙ブロックを区画するために築地崩跡ないしは版築土塁が採用されることは、他の城柵にはみられない伊治城跡の特徴といえる。なお、想定される官衙ブロックの規模は政庁よりも規模の大きいものとなる。ただし、確認しなければならない課題が多くある。SD322は政庁南門付近から西に約40mでとまることが確認されている。SD322の西側延長部分については第20次調査の際、トレーニングにより確認調査が行われているが、SD322とかかわる遺構が西側に続くことは確認されていない（註4）。このことからSD322の西側延長が内郭西辺付近まで続くかどうか、今後の発掘調査により確定する必要がある。さらに想定される官衙ブロックの範囲を確認する必要もある。また、今回調査区を設けた地点は想定される官衙ブロック西辺、東辺のほぼ中央に位置しているが、門の遺構は確認されなかつた。想定される官衙ブロックの門遺構の確認も今後の重要な検討課題と考えられる。

官衙ブロックの範囲や区画内部の建物配置、性格など官衙ブロックの詳細はこれからの調査の進展を待つ必要がある。また、政庁が最も整備された政庁Ⅱ期の段階にはこの2つの官衙ブロックは存在

したと想定されることから、他の城柵では類例のない築地跡ないしは版築土壁により区画される官衙ブロックが成立する歴史的な背景についても今後検討を加えていく必要がある。

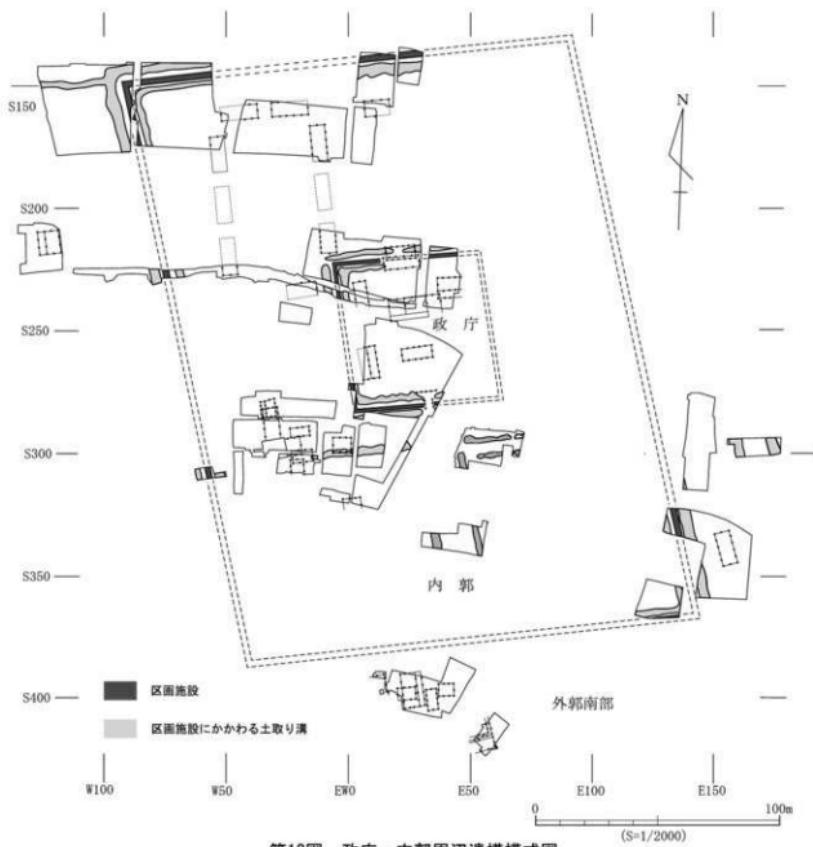
今回の調査により、伊治城跡の構造を考える上で重要な成果が得られたと考えられる。

【伊治城期以降の様相について】

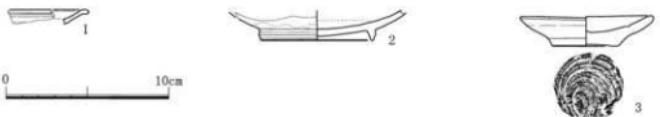
政庁内郭間地区において、伊治城期以降の古代の遺構が検出された。抜き取り痕跡に灰白色火山灰が含まれるSA760、SA761である。SA760はSD750の西側から始まり、一旦止まる。SA760の西延長上1mより始まるSA761は弧を描きながら南に続く。精査を行ったSA760では径0.2mの柱痕跡が密に確認されたことから、SA760、SA761は材木列跡であることが確認された。遺構は調査区の南側につづくため、区画の規模や内部の状況は不明である。さらにSA760、SA761と方向や位置関係がほぼ一致するSD754がある。SD754はSA760、SA761より新しいものであり、方向や位置関係がほぼ一致することから近接した時期のものと考えられる。確認されたSD754は調査区東側からはじまり、西側に伸び、SA760がとぎれSA761が始まる地点より南に折れ曲がり、南に続く。検出された平面形はL字状であるが、さらに調査区の東と南に続く。のことから、区画の規模や内部の状況は不明である。

SA760、SA761は灰白色火山灰降下前後の10世紀前半で、SD754は灰白色火山灰降下以降のものと考えられるが、出土遺物がなく詳細な時期は不明である。

伊治城跡の城柵官衙遺跡としての終末はこれまで遺構の重複関係や出土遺物から9世紀前葉と考えられており、それ以降の遺構変遷や出土遺物についてはほとんど論及されてこなかった。これまで知られている古代末～中世初期の遺物としては政庁付近で12世紀末から13世紀初頃とみられる手づくねかわらけ皿（大、小）、須恵器系中世陶器、青磁皿が出土するSE306（第19次）や材木列跡であるSA705（第35次）が知られており、外郭西辺の調査においても12世紀第4四半期頃のかわらけ皿（大）（第23次）が出土している（註5）。また、内郭南部、第27次調査区や第29次西区において、柱穴埋土に灰白色火山灰粒が含まれる10世紀前半代の建物跡（SB536、SB537、SB613）が検出されている。しかし、調査区の関係や出土遺物がほとんどないことから、詳細を検討することができない。ところで、これまでの発掘調査報告書に掲載されていない遺物のなかに伊治城期以降とみられる遺物がある。現在までに確認された出土遺物を紹介し、参考に供したい。これらは内郭南部（第27次調査区、第29次調査西区）から出土した遺物や外郭西辺にあたる要害地区で採集された遺物である。第13図1、2は29次西区SK627遺構面から出土した灰釉陶器碗である。猿投産のもので、黒笛90窓跡であり、9世紀後葉のものと考えられる（註5）。内面、外面ともに擦痕が確認され、硯に転用されたとみられる。特に外面では朱が確認される。9世紀後半以降の伊治城跡の機能や性格を考えていく上で貴重な遺物といえる。第13図3は要害地区で採集された土師器高台皿は小型のものである。底部が厚く、体部が大きくひらくものである。採集品が1点あるのみのため、遺物の年代は明確ではないが、今までの古代末の土器の研究成果を参照すると10世紀後葉以降のものと考えられる（井上2006、宮多研2007など）。これらの9世紀後半以降の遺物が確認されたことから、城柵官衙遺跡として伊治城跡が機能していた時期以降の遺構、遺物の詳細を検討していくことも今後の重要な課題であると思われる。



第12図 政府・内郭周辺遺構模式図



| 番号 | 出土遺構・層位 | 種別 | 器種 | 特徴 | 登録 | 写真 |
|----|--------------------------|------|------|--|-----|----|
| 1 | 29次西区SK626 検出面 | 灰釉陶器 | 碗 | 残存：口縁部破片。外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ。刷毛塗り。 胎土の色調：灰白（NB.0）。釉の色調：明オリーブ灰（2.5GY7/1）。 | | |
| 2 | 29次西区SK627 検出面 | 灰釉陶器 | 碗 | 残存：体～底部。器高1.8cm以上。底径：6.8cm。外面：ロクロナデ。 底部：回転ヘラ切り。内面：ロクロナデ。刷毛塗り。胎土の色調：灰白（NB.0）。釉の色調：明オリーブ灰（2.5GY7/1）。高台の形態：三日月高台。その他：内面、外面向ともに鏡に転用。特面には朱が付着。 | 図版8 | |
| 3 | 要害地区採集 (松森コレクション№130) | 土師器 | 高台付皿 | 残存：完形。器高：1.8cm。口径：8.0cm。底径：4.1cm。外面：ロクロナデ。灰白色（2.5Y8/2）。底部：回転糸切り。内面：ロクロナデ。灰白色（2.5Y8/2）。 | | |

第13図 伊治城期以降の古代の遺物

註

註1 西脇殿SB314abcは床東を持つ建物である。今後検討が必要ではあるが、東側に3間分の縁が取り付く可能性が考えられる。

註2 これまで確認されている土取り遺構、大溝は政庁ではSD228、SD229、SD230、SD226、SD227（築教委1992）、SD282、SD284、SD311（築教委1993）、SD332（築教委1993、1994）、内部ではSD103、SD132ab（築教委1989、1990、1994、1995、市教委2008）、SD330、SD331（築教委1994）、SD498（築教委1999）、外郭では北辺でSX456、SX460、SX462、SX464、SX477、SX490（築教委1998）、西辺でSD451、SX452、SX453（築教委1997）、南西隅でSD420、SX421、SX422（築教委1996）、南辺でSK601、SK602、SK603、SK604、SK621、（築教委2004）、SX645、SX646（築教委2005）、SX668、SX670、SX679（市教委2006）、SX666、SX669、SX671（市教委2007）、東辺でSD201、SD202（築教委1991）、SX503、SD504（築教委1999）などがある。

註3 第20次調査西C区で検出されているSK370は位置関係からSD322に伴う区画施設構築のための土取り穴の可能性もありうるが、原図に注記がないので、どのような性格かは不明である。

註4 しかし、改めて平面図をみると20次西C区で確認されたSI357（III期）よりも古い落ち込みはSD322の西延長線上にあり、さらに20次西D区で確認されたSD375はSD322とかかわる遺構の可能性もある。SD375は緻密にいえSD322の西延長より南にややずれる。また、SD375よりも新しいSK364の西壁は地山であることから、SD375がSD322の西延長であった場合、内郭西辺の手前でとまる可能性が考えられる。また、SD322の南に位置するSB359（III期）よりも古いSD343の位置付けも想定される官衙ブロックの成立、範囲、年代、性格を考える上で重要なと思われる。

註5 伊治城跡や長者原遺跡などから出土したかわらけの年代については、平成22年2月6日に築館出土文化財管理センターにおいて飯村均氏、八重櫻忠耕氏、川又隆央氏、鈴木弘太氏、及川真紀氏に遺物を実見していただいた上、ご教示いただいた。

註6 灰釉陶器の観察に際しては柳沢和明氏、吉川一明氏、三好秀樹氏にご教示いただいた。この他、第27次調査区SB534などより灰釉陶器の小片が2点出土している。猿投産のものであり、黒塗14窓跡ないしは黒塗9窓跡のものである。



第4図 今回の調査地点と政庁及び内郭周辺の検出遺構

7.まとめ

- (1) 第5次5ヵ年計画は、政府及び内郭域について史跡公園として整備を行うための追加の資料を得ることを目的としている。3年目にあたる今回の調査では政府南門跡の再調査と政府内郭間の政府中軸線上で調査を行った。
- (2) 政府南門跡及び目隠し堀跡の再調査を実施した結果、3時期の掘り方を確認することができた。最も新しい掘り方埋土に焼土粒がわずかに含まれることから、正殿や西脇殿などの政府内の主要な建物跡と同様に宝亀11年（780）「伊治公皆麻呂の乱」による焼失後再建されていることが確認された。のことから、火災前後の政府の規模は同じであることが確定した。
- (3) 政府内郭間地区では、政府中軸線と同一方向の溝跡が2条確認された。確認された溝跡の幅は内側で計測すると13.8～14m、溝跡芯々で計測すると16.6mである。2条の溝跡間は内郭から政府南門に至る道路跡（南大路）であり、2条の溝跡は道路側溝であると考えられる。
- (4) 政府内郭間地区で検出された2条の溝跡はいずれも堆積土中に築地崩壊土ブロックが含まれていた。これまでの調査成果から政府南側に築地堀ないしは版築土壁で区画される官衙ブロックが存在する可能性が考えられる。今回の調査により、伊治城跡の構造を考える上で重要な成果を得ることができた。

付表1 伊治城跡の発掘調査

◎多賀城跡調査研究所による調査

| 年 次 | 調査原因 | 発掘面積 | 発掘期間 | 主な検出遺構と出土遺物 | 文献 |
|------------------|---------------------------|--|----------------------------|------------------------------------|-----|
| 昭和51年度 (1976) | 地形図測量(航空測量) 現地踏査・史跡整理 | | | | |
| 昭和52年度 (1977) | ①外郭北辺区画施設発掘調査 外郭北端発掘調査 | 168m ² 270m ² | 7/4 ~ 8/3 7/4 ~ 7/18 | 大溝1、土塁1、土堤状遺構1 焼失堅穴住居1、墨書き器「城耐」 | (1) |
| 昭和53年度 (1978) | ②外郭北部発掘調査 外郭西辺区画施設電気探査 | 780m ² | 7/3 ~ 8/4 11/11 ~ 11/13 | 掘立柱建物1、堅穴住居4 | (2) |
| 昭和54年度 (1979) | ③外郭北部発掘調査 | 1,000m ² | 10/29 ~ 12/4 | 掘立柱建物2、堅穴住居7 | (3) |

◎栗原市教育委員会・宮城県教育委員会による調査(1987~2004)は旧栗原町教育委員会による調査)

| 年 次 | 調査原因 | 発掘面積 | 発掘期間 | 主な検出遺構と出土遺物 | 文献 |
|------------------|---------------|---------------------|---------------|---|------|
| 昭和62年度 (1987) | 1. 耕造整備 | 220m ² | 7/1 ~ 8/12 | 堅穴住居5(焼失1) | (4) |
| | 2. 農協支所移転 | 150m ² | 7/4 ~ 7/18 | 堅穴住居1 | |
| | 3. 個人住宅便道取付 | 2 m ² | 8/5 | | |
| | 4. 土道管理設 | 1,250m ² | 9/1 ~ 9/14 | 堅穴住居8 | |
| | 5. 耕造整備 | 1,080m ² | 1/18 ~ 2/9 | 堅穴住居7 | |
| | 6. 施合建築 | 80m ² | 2/25 | | |
| 昭和63年度 (1988) | 7. 国庫補助事業 | 1,500m ² | 7/1 ~ 10/30 | 内郭外溝、堅穴住居2 | (5) |
| | 8. 水道管理設 | 142m ² | 11/4 ~ 11/24 | 外郭東辺大溝? 堅穴住居3 | |
| | 9. 耕造整備 | 504m ² | 2/6 ~ 2/12 | | |
| | 10. 老地現状変更 | 480m ² | 4/11 ~ 6/1 | 掘立柱建物1、堅穴住居9、土器埋設1 | |
| 平成元年度 (1989) | 11. 国庫補助事業 | 1,200m ² | 7/21 ~ 11/22 | 【内郭北西】区画施設・外溝、掘立柱建物3、堅穴住居10 | (6) |
| | 12. 通字路整備 | 1,700m ² | 9/5 ~ 9/16 | 外郭北辺大溝、古墳前期居住跡区画溝 | |
| | 13. 農道整備 | 1,960m ² | 10/16 ~ 11/20 | 内郭区画施設・外溝、【政厅】正殿、北西建物 | |
| | 14. 土道管理設 | 170m ² | 11/29 ~ 12/8 | 堅穴住居7? 3 | |
| 平成2年度 (1990) | 15. 国庫補助事業 | 900m ² | 9/3 ~ 9/29 | 【内郭北西】掘立柱建物3、堅穴住居8 | (7) |
| | 16. 道路整備(大堤線) | 1,320m ² | 9/27 ~ 10/5 | 外郭東辺大溝? 【外郭北部】堅穴住居16 | |
| 平成3年度 (1991) | 17. 国庫補助事業 | 1,300m ² | 5/27 ~ 7/16 | 【政厅】正殿、北殿、北西建物、北東建物、築地 | (8) |
| | 18. 個人住宅 | 300m ² | 11/19 ~ 12/2 | 古墳前期居住跡 | |
| 平成4年度 (1992) | 19. 国庫補助事業 | 1,300m ² | 5/11 ~ 7/4 | 【政厅】正殿、前殿、西脇殿、日輪扇、南門、築地 【内郭南西】築地? 掘立柱建物2、堅穴住居1 | (9) |
| | 20. 国庫補助事業 | 1,500m ² | 10/4 ~ 11/18 | 【内郭南西】区画施設、外溝、掘立柱建物1、堅穴住居5 | |
| 平成6年度 (1994) | 21. 国庫補助事業 | 820m ² | 10/3 ~ 11/27 | 【内郭北部】区画施設、掘立柱建物1、堅穴住居9 【内郭南西】掘立柱建物1、堅穴住居3 | (10) |
| | 22. 国庫補助事業 | 1,140m ² | 10/5 ~ 11/14 | 【内郭北部】掘立柱建物1 【外郭南西端】外郭区画施設・大溝、掘立柱建物1 【外郭南西外側】掘立柱建物3 | |
| 平成8年度 (1996) | 23. 国庫補助事業 | 450m ² | 10/7 ~ 11/7 | 【外郭西辺】区画施設・大溝 【外郭西端】掘立柱1、堅穴住居1 | (11) |
| | 24. 国庫補助事業 | 480m ² | 10/6 ~ 11/7 | 【外郭北辺】土塁、大溝、堅穴住居1 | |
| 平成10年度 (1998) | 25. 国庫補助事業 | 450m ² | 10/23 ~ 11/13 | 【外郭東辺】区画施設、大溝 【外郭南東】掘立柱建物2、堅穴住居8 | (12) |
| | 26. 国庫補助事業 | 200m ² | 11/8 ~ 11/22 | 【外郭南東端】区画施設、大溝 【外郭南東】堅穴住居12、「機」報告 | |
| 平成12年度 (2000) | 27. 国庫補助事業 | 500m ² | 10/16 ~ 11/8 | 【外郭南端部】掘立柱建物13 | (13) |
| | 28. 国庫補助事業 | 400m ² | 11/5 ~ 11/15 | 【外郭南西部】掘立柱建物7、堅穴建物1、堅穴住居2 | |
| 平成15年度 (2003) | 29. 国庫補助事業 | 500m ² | 10/3 ~ 11/6 | 【外郭南辺部】掘立柱建物、旧石器 | (14) |
| | 30. 国庫補助事業 | 450m ² | 11/1 ~ 12/10 | 【外郭南辺部】掘立柱建物2、土取りによる溝状遺構 | |
| 平成16年度 (2004) | 31. 国庫補助事業 | 400m ² | 8/29 ~ 10/25 | 【外郭南辺部】掘立柱建物、区画施設、土取りによる溝状遺構 | (15) |
| | 32. 農道整備事業 | 230m ² | 10/25 ~ 2/28 | 【外郭西辺部】堅穴住居1、溝2、井戸跡1 | |
| 平成18年度 (2006) | 33. 国庫補助事業 | 300m ² | 11/1 ~ 12/27 | 【外郭南辺部】掘立柱建物2、築地2、土取りによる溝状遺構 | (16) |
| | 34. 農道整備事業 | 300m ² | 4/24 ~ 8/27 | 【内郭西辺部】区画施設・区画溝3、堅穴住居1、溝12、井戸跡12 | |
| 平成19年度 (2007) | 35. 国庫補助事業 | 300m ² | 9/28 ~ 11/16 | 【内郭南端】溝跡8、掘立柱建物跡2、材木列跡1 | (17) |
| | 36. 国庫補助事業 | 310m ² | 10/17 ~ 12/12 | 【内郭西部】掘立柱建物4、堅穴住居5、古墳3 | |
| 平成20年度 (2008) | 37. ほ堀整備事業 | 698m ² | 11/19 ~ 12/2 | 【遺跡北側地域】スクモ層確認 | (18) |
| | 38. ほ堀整備事業 | 2,130m ² | 11/26 ~ 12/9 | 【遺跡東側地域】スクモ層、灰白色山灰確認 | |
| | 39. 国庫補助事業 | 360m ² | 12/10 ~ 12/28 | 【政厅・内閣】日麗・朝耕、築地跡2、土取り溝4 【政厅・内閣】土取り溝2、遺跡1、材木列跡1 | |
| 平成21年度 (2009) | | | | | 本書 |

付表2 伊治城および栗原郡に関する古代史年表

| 西暦 | 和暦 | 記事 | 文献 |
|-----------------|-------------|--|------------------------------|
| 767 | 神護景雲1 | 10. 伊治城の造営なる。造営にたずさわった鎮守將軍田中多太麻呂に叙位、外從五位下道嶋三山は從五位上を賜う。 | 統日本紀 |
| 768 | 2 | 12. 陸奥や他国百姓で伊治・桃生に住みたいものの課役を免する。 | 統日本紀 |
| 769 | 3 | 1. 伊治・桃生にうつり住みたいものの課役を免ずる。 2. 桃生・伊治に板東8国百姓を募り安置しようとする。 6. 栗原郡を置く。これはもと伊治城である。 (「統日本紀」では神護景雲元年11月乙巳条に収めるが錯簡とみられ、ここでは神護景雲3年6月9日乙巳説をとる) 6. 浮名の百姓2,500人を伊治城に遷す。 | 統日本紀 統日本紀 統日本紀 統日本紀 |
| 778 | 宝亀9 | 6. 志波村の蝦夷との戦いで功績のあった陸奥・出羽の国司以下2267人に位階・勲位を授ける。伊治公啓麻呂は外從五位下を賜う。 | 統日本紀 |
| 780 | 11 | 3. 上治郡大領伊治公啓麻呂は牡鹿郡の大領道嶋大槻、按察使紀広純を伊治城で殺す。ついで、多賀城にせまり府庫の物をとり放火する。 | 統日本紀 |
| 792 | 延暦11 | 1. 斯波村の夷胆沢阿奴志己らは帰服したいが伊治村の仔に妨げられて果たせないでいることを訴える。 | 類聚国史卷190 |
| 796 | 15 | 11. 伊治城と玉造塞の中間に1駅を置く。 11. 相模・武藏・上総・常陸・上野・下野・出羽・越後などの住民9,000人を伊治城に遷し置く。 | 日本後紀 日本後紀 |
| 804 | 23 | 11. 栗原郡に3駅を置く。 | 日本後紀 |
| 837 | 承和4 | 4. 3年春より百姓の妖言に奥邑の民が動搖し、栗原・賀美両郡の百姓多く逃亡する。また、栗原・桃生以北の俘囚は反覆して定まらないので援兵1,000人を差発して非常に備える。 | 統日本後紀 |
| 905 | 延喜5 (着手) | 延喜式 ○神名式 陸奥国100座 栗原郡7座 大1座 志波姫神社 小6座 表刀神社 雄鏡神社 駒形根神社 和我神社 香取御兒神社 遠流志別石神社 ○民部式 東山道・陸奥国大國志太、栗原、磐井..... ○兵部式 陸奥国駿馬玉造、栗原、磐井..... 各5疋 | 延喜式 |
| 931 { 938 | 承平年間 | 和名類聚抄 陸奥国 栗原郡(久利波良) (郷名)栗原・清水・仲村・会津 | 和名類聚抄 |

伊治城跡発掘調査報告書等一覧

- (1) 宮城県多賀城跡調査研究所1978「伊治城跡I・昭和52年度発掘調査報告書・」多賀城関連遺跡発掘調査報告書第3冊
(2) 宮城県多賀城跡調査研究所1979「伊治城跡II・昭和53年度発掘調査報告書・」多賀城関連遺跡発掘調査報告書第4冊
(3) 宮城県多賀城跡調査研究所1980「伊治城跡III・昭和54年度発掘調査報告書・」多賀城関連遺跡発掘調査報告書第5冊
(4) 築館町教育委員会1988「伊治城跡・昭和62年度発掘調査概報・」築館町文化財調査報告書第1集
(5) 築館町教育委員会1989「伊治城跡・昭和63年度発掘調査概報・」築館町文化財調査報告書第2集
(6) 築館町教育委員会1990「伊治城跡・平成元年度発掘調査概報・」築館町文化財調査報告書第3集
(7) 築館町教育委員会1991「伊治城跡・平成2年度発掘調査概報・」築館町文化財調査報告書第4集
(8) 築館町教育委員会1992「伊治城跡・平成3年度発掘調査概報・」築館町文化財調査報告書第5集
(9) 築館町教育委員会1993「伊治城跡・平成4年度発掘調査概報・」築館町文化財調査報告書第6集
(10) 築館町教育委員会1994「伊治城跡・平成5年度発掘調査概報・」築館町文化財調査報告書第7集
(11) 築館町教育委員会1995「伊治城跡・平成6年度発掘調査概報・」築館町文化財調査報告書第8集
(12) 築館町教育委員会1996「伊治城跡・平成7年度・第22次発掘調査報告書・」築館町文化財調査報告書第9集
(13) 築館町教育委員会1997「伊治城跡・平成8年度・第23次発掘調査報告書・」築館町文化財調査報告書第10集
(14) 築館町教育委員会1998「伊治城跡・平成9年度・第24次発掘調査報告書・」築館町文化財調査報告書第11集
(15) 築館町教育委員会1999「伊治城跡・平成10年度・第25次発掘調査報告書・」築館町文化財調査報告書第12集
(16) 築館町教育委員会2000「伊治城跡・平成11年度・第26次発掘調査報告書・」築館町文化財調査報告書第13集
(17) 築館町教育委員会2001「伊治城跡・平成12年度・第27次発掘調査報告書・」築館町文化財調査報告書第14集
(18) 築館町教育委員会2002「伊治城跡・平成13年度・第28次発掘調査報告書・」
『伊治城跡・嘉倉貝塚』築館町文化財調査報告書第15集
(19) 築館町教育委員会2004「伊治城跡・平成15年度・第29次発掘調査報告書・」築館町文化財調査報告書第17集
(20) 築館町教育委員会2005「伊治城跡・平成16年度・第30次発掘調査報告書・」築館町文化財調査報告書第19集
(21) 栗原市教育委員会2006「伊治城跡・平成17年度・第31次発掘調査概報・」栗原市文化財調査報告書第1集
(22) 栗原市教育委員会2006「国史跡伊治城跡保存管理計画書」
(23) 栗原市教育委員会2007「伊治城跡・平成18年度・第32次発掘調査報告書・」栗原市文化財調査報告書第4集
(24) 栗原市教育委員会2008「伊治城跡・平成19年度・第35次発掘調査報告書・」栗原市文化財調査報告書第7集
(25) 栗原市教育委員会2009「伊治城跡・平成20年度・第36次発掘調査報告書・」栗原市文化財調査報告書第9集

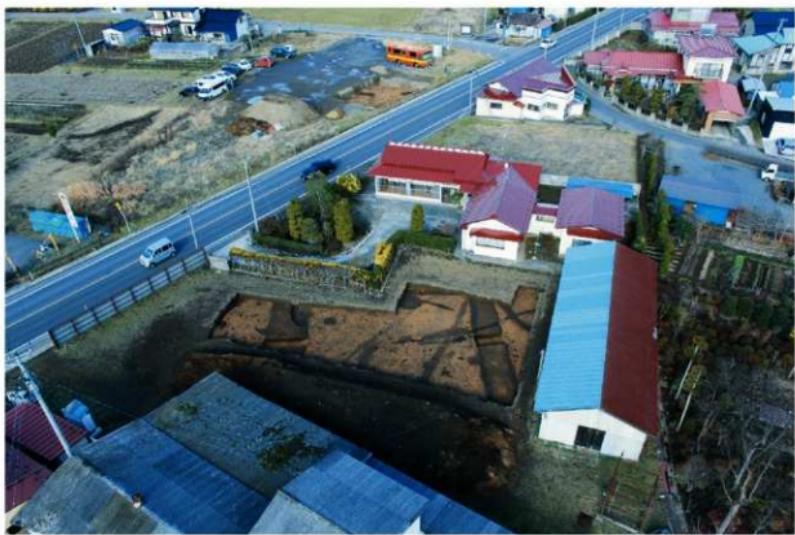
引用・参考文献

- 黒板勝美1955『新訂増補國史大系 延喜式後編』吉川弘文館
栗原寺調査团1963「栗原寺の諸問題」『栗原町史』追録第二pp. 1135~1147
築館町文化財保護委員会1970「伊治城跡出土遺物目録並文献資料」築館町文化財保護委員会伊治城跡資料第二集
栗原町教育委員会1972「鳥矢ヶ崎古墳群発掘調査概報」栗原町埋蔵文化財報告
宮城県教育委員会1978「糠塚遺跡」宮城県文化財発掘調査略報(昭和52年度分)
宮城県文化財調査報告書第53集pp. 44~198
宮城県教育委員会1980a「原田遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書II』宮城県文化財調査報告書第63集pp. 409~423
宮城県教育委員会1980b「宇南遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書III』宮城県文化財調査報告書第69集pp. 501~556
宮城県教育委員会1980c「大門遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書II』宮城県文化財調査報告書第62集pp. 273~306
宮城県教育委員会1980d「佐野遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書II』宮城県文化財調査報告書第63集pp. 425~546
宮城県教育委員会1982「御胸堂遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書IV』宮城県文化財調査報告書第83集pp. 307~584
宮城県教育委員会1983「佐内屋敷遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書V』宮城県文化財調査報告書第93集pp. 289~546
進藤秋輝1991「古代城柵の設置とその意義」『北からの視点』日本考古学会協会1991年度宮城・仙台大会資料集pp. 131~142
村田晃一1992「多賀城周辺における奈良・平安時代の須恵器生産」
『大戸窯検討のための会津シンポジウム 東日本における古代・中世窯業の諸問題』
栗原町教育委員会1995「長者原遺跡」栗原町文化財調査報告書第3集
宮城県教育委員会1998「宮城県遺跡地図」宮城県文化財調査報告書第176集
盛岡市教育委員会2000「志波城跡 - 第I期保存整備事業報告書 -」
宮城県多賀城跡調査研究所2001「桃生城跡Ⅳ・多賀城関連遺跡発掘調査報告書第26冊
築館町教育委員会2002「嘉倉貝塚」「伊治城跡・嘉倉貝塚」築館町文化財調査報告書第15集
築館町教育委員会2003「嘉倉貝塚」築館町文化財調査報告書第16集
宮城県教育委員会2003「嘉倉貝塚」宮城県文化財調査報告書第192集
村田晃一2004「三重構造城柵論」伊治城の基本的な整理を中心として「移民の時代2-」『宮城考古学』第6号pp. 159~186
志波町教育委員会2005「御胸堂遺跡」志波町文化財調査報告書第1集
築館町教育委員会2005「幡沢遺跡」築館町文化財調査報告書第18集
井上雅孝2006「総論-11世紀の土器研究に関する諸問題-」『古代末期時検討会資料集 清原のかわらけ
一大島井柵跡を中心にして-』横手市教育委員会・後三年合戦(役)史跡検討会pp. 1~26
栗原市教育委員会2006「泉沢A遺跡」栗原市文化財調査報告書第2集
栗原市教育委員会2007「水汲遺跡」『平成19年度宮城県遺跡調査成果発表会資料』pp. 69~72
宮城県多賀城跡調査研究所2007「宮城県多賀城跡調査研究年報2006」
栗原市教育委員会2008「下萩沢遺跡・宅地造成工事に伴う発掘調査報告書・」栗原市文化財調査報告書第6集
宮城県教育委員会2009「原田遺跡・下萩沢遺跡一般国道4号築館バイパス関連遺跡調査報告書I-」
宮城県文化財調査報告書第219集

写 真 図 版



調査区遠景、上空より



調査区遠景、南上空より

写真図版 1



政府南門跡地区



政府南門地区、南上空より

写真図版2



SB314、南より



SB314P1、南より



SB314P2、南より



SB314P3、南より



SB314P4断面、北より



SB314P5、南より



SB314P6断面、南より



写真図版3

SF746、西より



SB314 · SF745、西より



SB314 · SF746、東より



SX748断面、北より



SA312 · SD313、東より



SA312P2、南より



SA312P3、南より



SA312P4、南より



SA312P5断面、北西より

写真図版 4



政府内郭間地区



政府内郭間地区近景、西より



SD750検出状況、南より



SD750断面、南より



SD750築地崩壊土ブロック、西より



SD750築地崩壊土ブロック、西より



SD751検出状況、南より



SD751断面、南より



SD751築地崩壊土ブロック、南より



SD751築地崩壊土ブロック、南より



SK753検出状況、東より



SK753断面、東より



SX765検出状況、南東より



SD754・SA760・SA761検出状況、南より



SA760柱痕跡確認状況、西より



SD754・SA760断面、東より



SD762検出状況、西より



SD762断面、西より



SD750 : 5、8 29次西区SK627 : 9

SD751 : 3、6、7

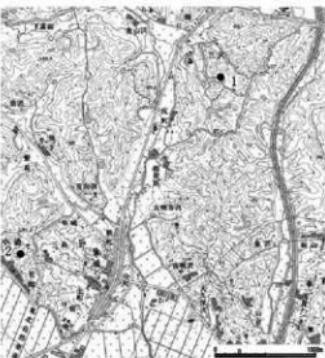
SK753 : 1、2、4

图版8 出土遗物

附章. 三沢窯跡（栗原市金成地区）出土遺物について

1.はじめに

三沢窯跡は栗原市金成三沢に所在する古代の窯跡である。昭和20年代後半から昭和30年代に遺物が採集されている。1967年加藤孝氏により「金成窯」として紹介されており、1976年『陸奥国官窯跡群 II』では窯跡の立地と基数、出土遺物の記載がある。また、宮城県多賀城跡調査研究所には伊治城跡の発掘調査期間中に撮影された遺物の写真が保管されている。しかし、これまで遺物の詳細は紹介されたことがなかった。遺物は現在、栗原市金成歴史民俗資料館において保管、公開されている。古代栗原郡域における窯業生産の状況を検討していくため、平成18年に資料の観察、整理を実施した。



第15図 三沢窯跡の位置

2. 窯跡の立地について

窯跡は奥羽山脈から東に派生する丘陵から南東方向にのびる小丘陵に位置する。この小丘陵の西側には幅の狭い谷底平野が南北に伸び、国道4号線が縦断する。小丘陵から西側の平野に向かい大小の沢が入る。窯跡は西側から入る大きな沢から、さらに枝分かれして北側にのびる沢の最奥部、南側斜面に立地する。窯跡付近は開田されており、法面部分に窯跡が7基ほどあり、断面観察ではスサ入りを使用した半地下式の窯跡の可能性が指摘されている（古窯跡研究会1976）（註1）。

3. 出土遺物の特徴と年代について

これまで確認されている遺物は須恵器壺、甕、壺の破片、軒丸瓦、平瓦、焼台、窯壁の破片が15点である。全点について資料化（写真、実測図、観察表）を実施した。

須恵器壺は全体の器形は不明であるが、碗形と考えられる。底部切り離しは回転糸切り無調整である。宮城県内で発掘調査が行われた須恵器窯跡出土資料と比較すると、9世紀後半から10世紀前半ころのものと考えられる。

軒丸瓦は外区に棒状の珠文、内区には棒状の弁端や隆線による間弁により蓮花文がネガティブに表現される単弁ないしは複弁蓮華文の可能性があるものである。残存範囲から想定される径は20.4cmで、本来は八弁か九弁であったと推定される。また、范傷も確認される。丸瓦との接合部分は瓦当部縁辺に近い位置に接合される。平瓦は凹面の布目が粗いもの（a類）と布目が細かいもの（b類）がある。a類及びb類の布目について3cm四方での糸の本数を計測すると、a類では縦糸15~17本、横糸15~18本、b類では縦糸29本、横糸29本である。また、平瓦a類の布目と同じ属性を持つとみられ

る丸瓦と須恵器が付着した焼台が存在することから、平瓦a類と須恵器は同様の年代とみられる。平瓦b類の断面形は円弧状で、その曲率は急である。また、凹面には段差がみられる。幅が均等ではなく、まっすぐには通らないが枠板の痕跡の可能性がある。硬質に焼成されていることから明確ではないが、粘土の合わせ目とみられる部分がある。このことから、平瓦b類は桶巻き作りの可能性もある。

4.まとめ

三沢窯跡出土遺物について簡単に紹介を行った。ネーミングをみると異なった時期に採集されているので、すべてが同時期のものとは明確ではない。しかし、須恵器と丸瓦が付着した焼台があること、焼台に用いられた丸瓦の布目と平瓦a類の布目の特徴が同じとみられることから、三沢窯跡は9世紀後半以降に須恵器と瓦と一緒に焼成した瓦陶兼窯であると考えられる。また、平瓦b類、軒丸瓦は特徴から平瓦a類とは時期が異なる可能性も考えられる。したがって、平瓦b類、軒丸瓦の詳細な年代については現段階では不明である。軒丸瓦は宮城県内及び岩手県内ではこれまで確認されていないものであり、三沢窯跡の具体的な内容を確認することやこの瓦がどこで用いられたかを解明することは重要な課題である。

なお、今回は遺物の資料化とおおよその概要の検討しかできなかった。今後は発掘調査により三沢窯跡の内容を把握したうえで、詳細な検討を行う必要がある。

註

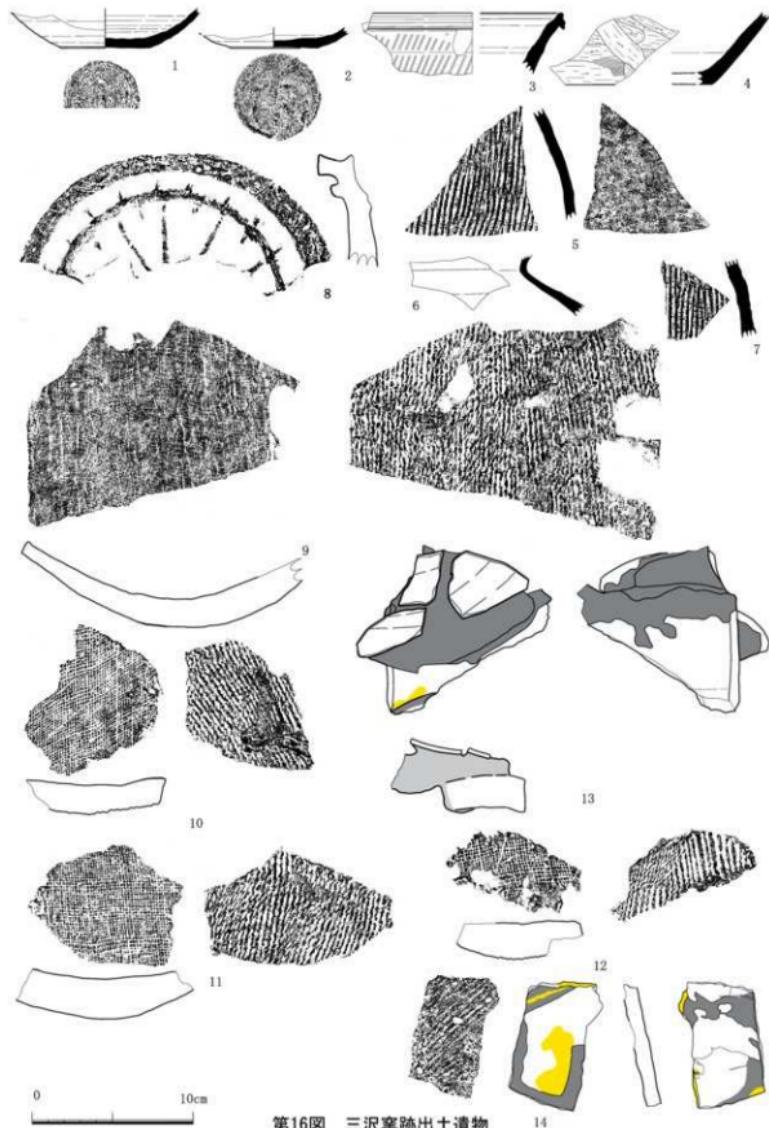
註1 三沢窯跡の位置は昭和37年度（熊谷輝雄氏、熱海昭征氏）、昭和50年度（熊谷輝雄氏）、平成21年度（千田茂男氏）の埋蔵文化財包蔵地カードを参照させていただいた。埋蔵文化財包蔵地カードに記載される地点と現在の宮城県遺跡地図では位置が異なる可能性が高い。平成18年に現在の遺跡範囲を踏査したが、開田されている南向きの斜面は確認できていない。埋蔵文化財包蔵地カードに記載される地点は現在の遺跡範囲の尾根を挟んだ南側の沢部分に該当する。また、昭和50年の埋蔵文化財包蔵地カードには昭和38年10月20日に高橋富雄氏、加藤孝氏により窯跡1基が発掘調査され、規模は長さ3.3m、幅1.2m、平面形はかまぼこ型であることや鉄滓、須恵器破片、布目瓦が多数出土したことが記されているが、調査の記録や出土遺物は今までのところ確認されていない。なお、地元の方によれば、南側の山林内でも遺物が出土するという。

註2 資料の検討でお世話になった方々のご指導、ご教示を賜りました。（所属は当時のもの）

佐川正敏（東北学院大学）、吉川一明、阿部恵、天野順陽、吉野武（宮城県多賀城跡研究所）、村田晃一（宮城県教育庁文化財保護課）、佐藤敏幸、依田英美子（東松島市教育委員会）、伊藤博幸（奥州市埋蔵文化財センター）、本澤慎輔（元平泉町埋蔵文化財センター）

参考文献

- 加藤孝1967「東北地方出土の人面墨書き土器」『柏倉亮吉教授還暦記念論文集 山形県の考古と歴史』
古窯跡研究会1976『陸奥国官窯跡群Ⅱ』古窯跡研究会研究報告第4冊



第16図 三沢窯跡出土遺物



写真図版9 三沢窯跡出土遺物

第5表 三沢窯跡出土遺物觀察表

| No. | 種別 | 器種 | 部 位 | 残存 | 器高 | 口径 | 底径 | 特 質 | 注 記 |
|-----|-----|----|-------|-----|-------|----|-----|--|-------------------|
| 1 | 須恵器 | 环 | 底部～体部 | 1/2 | (2.2) | — | 5.4 | 外面：ロクロナデ、灰白(2.5V7/1)～灰黄(2.5V7/2)、底部：回転糸切り、灰白(2.5V7/1)～灰黄(2.5V7/2)。 | 「37.8 三沢」の墨書き |
| 2 | 須恵器 | 环 | 底 部 | 破片 | (0.9) | — | 5.4 | 外面：ロクロナデ、灰白(2.5V7/1)、底部：回転糸切り、灰白(2.5V8/1)、内面：ロクロナデ、糸切り、灰白(2.5V7/1)～灰黄(2.5V7/2)。 | 「37.8 三沢」の墨書き |
| 3 | 須恵器 | 壺 | 口縁部 | 破片 | — | — | — | 外面：平行タタキ～ロクロナデ、灰白(0.7)。内面：ロクロナデ、灰(0.5)。内面には灰(光沢あり)が多く付着し、光沢を持つ。ガラス質の黒色物質が飛散付着。 | 「941123 三沢窯跡」鉛筆書き |
| 4 | 須恵器 | 壺 | 底部～体部 | 破片 | (4.3) | — | — | 外面：平行タタキ～ロクロナデ、灰(0.5)～灰白(0.5V7/1)、底部：不明、胎土：石英・長石をまばらに含む。内面に砂付着。 | 「37.8 三沢」の墨書き |
| 5 | 須恵器 | 壺 | 体 部 | 破片 | — | — | — | 外面：平行タタキ、灰(5V6/1)。内面：押さえ痕跡～ナデ。灰(0.5)、胎土：石英・長石をまばらに含む。内面に砂付着。 | 「壙 三沢36.9.10」の墨書き |
| 6 | 須恵器 | 壺 | 頸部～体部 | 破片 | — | — | — | 外面：ロクロナデ、部分的に砂付着、灰白(2.5V7/1)～黄灰(2.5V6/1)、内面：ロクロナデ、部分的に砂付着、灰白(2.5V7/1)～灰黄(2.5V7/2)。 | 「三沢」の墨書き |
| 7 | 須恵器 | 壺 | 体 部 | 破片 | — | — | — | 外面：平行タタキ、オーリーブ黒(10V3/1)。内面：ハクリ、灰白(0.8V7/2)～7/2)、灰(10V4/1)。断面に灰白色物質(灰か)付着。 | 「三沢」の墨書き |

| No. | 種別 | 器種 | 特 質 | | | | | 注 記 |
|-----|----|-----|--|------------------------------|--|--|--|-----|
| 8 | 瓦 | 軒丸瓦 | 瓦当部分：推定径20.4cm、棒状の珠文、棒状の弁済、隆線、9～10枚か。范造。側面：ナデ、内面：工具痕、接合部ナデ。内外面ともに灰(0.4)～灰(0.5V5/1)、2点接合。 | 金成 三沢 昭35.12 複弁連華文 アブミ瓦 | | | | |
| 9 | 瓦 | 平 瓦 | 凹面：布目版、横骨版、灰(0.4)～灰白(7.5V8/1)、側面：ケズリ、凸面：調タタキ、灰(7.5V5/1)～灰白(7.5V8/1)、胎土：砂粒をまばらに含む。 | 凹面「金成二沢昭和三〇、五平安初」の墨書き | | | | |
| 10 | 瓦 | 廣瓦か | 凹面：布目版、黃灰(2.5V5/1)、側面：ケズリ、凸面：調タタキ、押正版、灰黄(2.5V6/2)、胎土：砂粒を多く含む。 | 凹面「雄 三沢 36.9」の墨書き | | | | |
| 11 | 瓦 | 平 瓦 | 凹面：布目版、灰黄(2.5V6/2)、凸面：調タタキ、浅黄(2.5V7/3)。胎土砂粒を多く含む、胎土の緋あり。表面には灰(灰黄2.5V6/2)付着。 | 凹面「二六、七 金成 三沢 6」、凹面「J」の墨書きあり | | | | |
| 12 | 瓦 | 平 瓦 | 凹面：布目版、灰(3V6/1)～焼(7.5V7/6)、側面：ケズリ、凸面：調タタキ、押正版、灰(5V5/1)、胎土：砂粒をまばらに含む。 | 凹面「壙 三沢 35」の墨書き | | | | |

| No. | 種 別 | 特 質 | | | | | 注 記 |
|-----|-----|--|------------------------------|--|--|--|-----|
| 13 | 焼き台 | 須恵器と平瓦が付着。灰色(0.4)～5V6/1)。全体に灰(浅黄2.5V7/3)が付着。 | 須恵器部分に 「金成 三沢 昭35.12」の墨書き | | | | |
| 14 | 焼き台 | 須恵器全体部を転用。外面：平行タタキ、内面：ハクリ、ナデ？。外面及び内面、断面にまで灰、ガラス質の黒色物質、砂が付着。全焼に火を受け焼灰褐色(10K3/3)に変色。 | 「壙 三沢 35 热口」の墨書きあり | | | | |
| 15 | 窯壁か | 不整形に近い長方形。調整範囲はない。灰黄色(2.5V6/2)。表面に灰付着。胎土は砂粒をまばらに含み、気泡が目立つ。スラは入らない。焼き台の可能性もある。 | 「三沢」の墨書き | | | | |

報 告 書 抄 錄

栗原市文化財調査報告書第11集

伊治城跡

—平成21年度：第39次発掘調査報告書—

平成22年3月27日印刷

平成22年3月30日発行

発行 宮城県栗原市教育委員会

〒989-5171

宮城県栗原市金成沢辺町沖200番地

TEL: 0228-42-3515 FAX: 0228-42-3518

印刷 南部屋印刷株式会社

〒987-2215

宮城県栗原市築館高田一丁目7番36号

TEL: 0228-22-2131 FAX: 0228-22-2175
